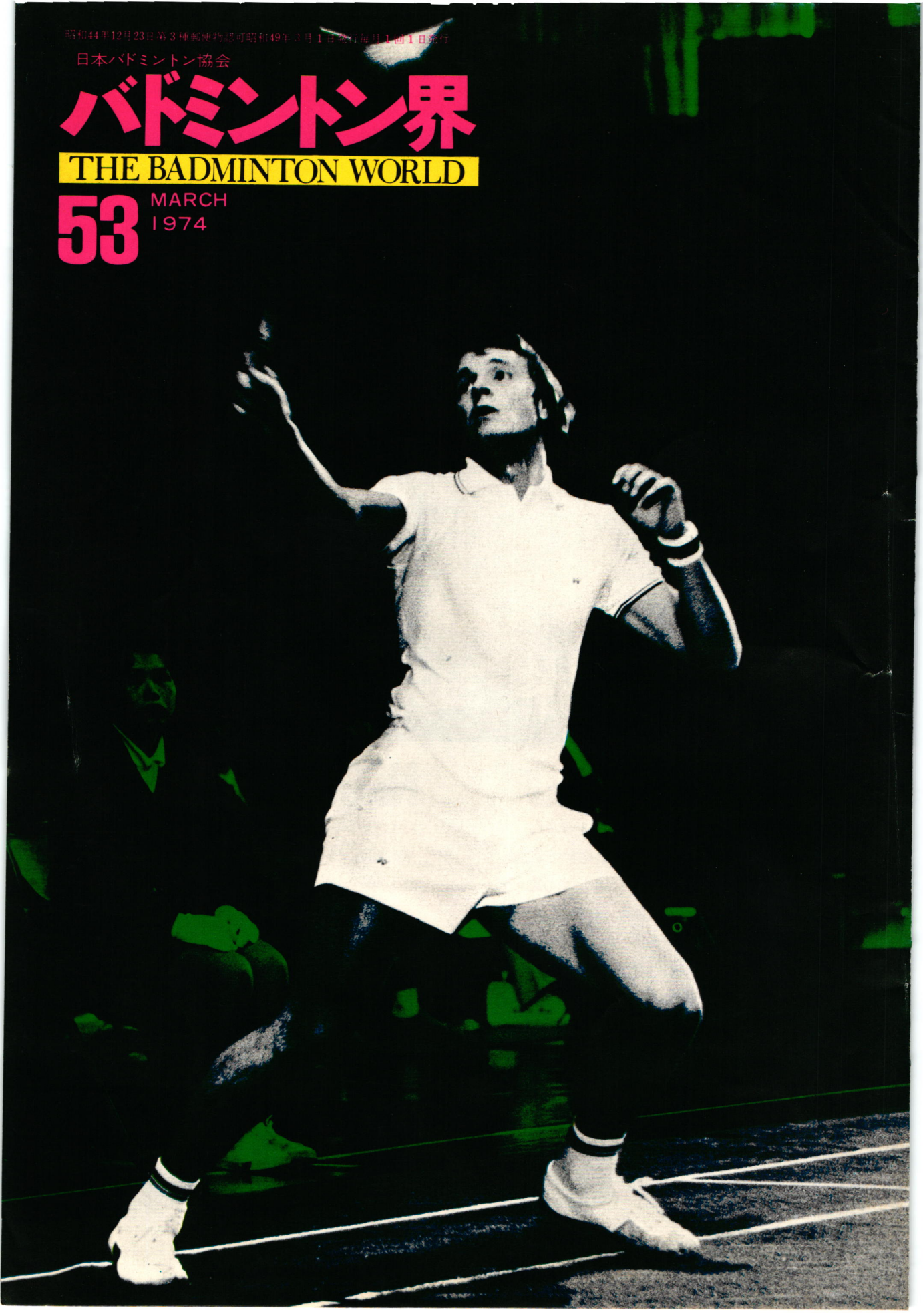
昭和44年12月23日第3種郵便物認可昭和49年3月1日発行毎月1回1日発行

日本バドミントン協会

バドミントン界

THE BADMINTON WORLD

53 MARCH 1974





国籍は世界。ヨネックス。

ヨネヤマが
社名変更しました。

世界の一流プレイヤーに使われ、世界のコートで熱い視線を浴びてきたヨネヤマが、名前を変えました。いま、こころも新たにヨネックス。世界のレベルを決めるブランドに、ふさわしい名前です。グローバルな響きです。バドミントンを科学の目でとらえるヨネヤマの、力強い変身。ヨネックス。この5文字が、ことばの違いを越え、国籍を越えて、ひとびとの心をひとつに結びます。すでにもう、世界のひとたちはかってのヨネヤマをヨネックスと、そう呼びはじめました。さあ、あなたも。

No.9000

ハイステンレス
￥4,800(フレーム・ケース付)
￥5,400(ヨネックスシープ張上・ケース付)

YONEX



バドミントン界 〈49年3月号〉

★全英選手権を終えて I（湯木博恵）……2
★全英選手権を終えて II（栂野尾昌一）……3
体当たり実戦教室〈第3回〉（小島一平）……4
私の歩んできた道〈第2回〉（中山紀子）……6
読者と編集者……9
★スナップ写真集（ナイスショット）……10
デブリン杯観戦記……32
マスコミのとらえたバドミントン……34
協会通信……39
★お知らせ・編集室から・次号予告……40

スタッフ／表紙撮影・山田真市／同製作・小浜正道／グラフ写真・山田真市・尾崎惟信／協力・日本協会事務局、各都道府県協会、愛読者

全英選手権を終えて Ⅰ

シングルスで優勝した 湯木博恵

湯木博恵選手が、今年の全英選手権大会シングルスで優勝した。この大会は、いうまでもなく、個人の事実上の世界選手権であるから、彼女は見事、女王の座についたわけである。

しかし、彼女にとって、この女王の座は初めてではない。五年前の一九六九年、日本女子体育大学二年生のときに初出場で優勝している。そして、翌年も連続優勝を狙いながら、直前のデンマーク選手権で左アキレス腱を切るというアクシデントで涙をのんでいる。

このときは、湯木選手の選手生命も危ぶまれたが、持ち前の闘志でカムバック。一九七一年の同大会で、中山紀子選手と組んだダブルスで優勝している。そして、翌一九七二年は、パートナー中山選手に決勝で敗れ、昨年も確実視されながら、準決勝で、イギリスのギルクス夫人にストレート負けを喫した。

こういったいきさつをふまえての女王の座カムバックであるから、さぞかし喜びもひとしおではないだろうか。

そこで、まず優勝しての感想をきいてみると、

「とってもうれしいです。今年はねらっていましたから……。毎年ねらってはいるんですけれど、今年は昨年の失敗をくり返さないようにと思って試合に臨んで、確実に手にすることができたので本当に喜んでいます」

と、はずんだ声が返ってきた。

湯木選手は、全英選手権の前のデンマーク選手権にも優勝しているが、そこで優勝してみて、これなら全英もいけるな、とか何か見通しのようなものを持ったのだろうか。

「いいえ、デンマークではとにかく体調を整えるのでせいいっぱいなんです。というのは、デンマークの決勝あたりで、ちょうど練習疲れと、飛行機の疲れがピークになるんです。だから、とにかく自分のコンディションを調整するということで、とても全英への見通しなどをたてるわけにはいきませんでした」

ということである。

デンマークの次に、グラスゴー招待大会を経て、いよいよ全英選手権に乗り込んだわけである。ここで彼女の試合のスケジュールを追ってみよう。

三月二十日・シングルス、P・E・ウェトナール（イギリス）に2－0で勝つ。続いてM・マイヤ（デンマーク）に2－0で勝つ。

三月二十一日・シングルス準々決勝、M・ベック（イギリス）に勝つ。ダブルス一回戦、午後六時三十分、同二回戦八時三十分。

三月二十二日・シングルス準決勝、バン・ビューセコム（オランダ）に2－1で勝つ、ダブルス準々決勝、M・ベック・M・ギルクス組に敗る。

三月二十三日・シングルス決勝、M・ギルクスに2－0で勝って優勝。

しかし、内容的にはどうだったのだろうか。

「準決勝のヨーケ・バン・ビューセコムとの試合が苦しかったんです。何しろヨーケが、このあいだ日本へ来たときとは全然違うんです。ミスをしないでよく返してくるんです。スコアはファイナルで勝っていますが、下手をしたらストレートで負けるところでした。

よく、ヨーロッパの選手はあきらめが早いとか、あまり粘らないなどといいますが、実際はそんなことないんです。十分注意してかからないと非常に危険です」

オリンピックなどでも、外国の選手は、本番で最高のタイムを残したりするが、バドミントンも例外ではないようだ。

さて、いよいよ決勝となるわけだが……。

「決勝は、ギルクスが去年私に勝っているということで、かなり勝ちを意識していたようです。そのために固くなっていて、あの長身からくりだすドロップやスマッシュにいつもの威力がみられませんでした。

私は、これで非常にたすかって、1ゲーム目をらくにとってしまったんです。しかし、2ゲーム目になると、ギルクスも固さがとれてリラックスし、試合のほうもシーソーゲームで進んでいきました。

そして、9－9のセッティングになり、ギルクスが2本連取して、マッチポイントを握ったんです。これはやられたかと思いました。もしファイナルということになれば、何かイヤな感じがしていたし、危いなと思ったんです。

ですから、私にサービス権が戻ってきたときに、ここで何とか追いついてしまおうと考え、ショートサービスをやって、2本取って追いついたんです。そしてマッチポイントもショートサービスをしました。ところがやはり力がはいってしまったんですね。固くなって、サービスのほうはフワッと浮いてしまい、しまった、やられたと思ったんです。

そうしたら、ギルクスが突っ込んで打ったスマッシュが決まなくて、まっすぐバックアウトになってしまったんです。本当にラッキーな優勝でした」

スコアは、ストレート勝ちだったが、この話をきくと、さぞかし応援していたチームメイトは、心臓のとまる思いだったことだろう。

しかし、逆に考えれば、これだけ苦労して王座を獲得したのだから、自信のほうもついたのではないだろうか。

これについて、彼女は、

「さあ、どうでしょうか」

と笑ってしまった。

今回の全英には、インドネシアの女子チームは参加していなかったが、その他の国の選手をみて、来年のユーバー杯についてどう考えているのだろうか。

やはり、彼女を軸にして日本は展開することになるだろうから。

「そうですね……。インドネシアは出場していなかったので全くわからないんですが、一番こ

わいのはイギリスだと思います。なんといってもダブルスは、今回優勝したベック・ギルクス組と、二位になったボクソール・ウェトナール組の二つが確実ですし、シングルスも充実しています。

これに比べると、日本はダブルスにおいても、シングルスにおいても、第二あるいは第三というのが不安ですから、この点で日本のほうが、まだ下にあると考えなければいけないと思います。

現在の段階では、イギリスには分が悪いのではないかと思っています」

勝ってカブトの緒を、というところだろう。

来年のユーバー杯では当然、彼女が主力になるわけだし、まだまだ頑張ってもらわなければならない。しかし、湯木選手も今年は二十六才になる。そろそろ結婚も……。

「そうですねえ……。でも、これは相手もあることですし、私にはユーバー杯もありますし、当分無理でしょう。」

そんなことといわずに、理解のある男性もいるだろうし、また結婚したらもうプレーできないというわけでもないし、

「でも、私の場合、結婚したら家庭に全力を傾けることになるでしょうから、結婚しても今のように、プレーをできるとは思っていません。」

ということである。そして、結婚なんて、遠い遠い雲の上のことですよ、といいながらも、

「ときどき夢には見るんですよ、ウフフ……」

その夢に、相手の顔がはっきりでてくるのかどうか、は残念ながら聞きもらしてしまった。

世界の女王の座に返り咲いた湯木選手、ますます快活で明かるい。今後の健闘を読者の皆さんと一緒に期待したい。（S）

全英選手権を終えて II
ダブルスで3位になった
栂野尾昌一

女子の毎年のタイトル獲得に対し、男子のほうは、全英選手権でなかなか上位にくいこむことができなかった。とくにここ数年は低迷ともいうべき状態だった。

しかし、今年は、ダブルスで池田・栂野尾組が健闘し、ベスト4に入賞した。そこで、どんな試合経過だったのか、またその感想などを栂野尾昌一選手にきいてみた。（池田信孝選手は折りからの公労のストライキのため、なかなかつかまらず、残念ながら談話はとれなかった。）

「ベスト4入りを決めた準々決勝は、イギリスのP・バリヴァン・W・キッド組と対戦したんですが、ファイナルそれもセッティング16オールの末、17－16で勝ったんで、それはうれしかった。」

続く準決勝のほうはどうだったのか、きくと、

「結局、この相手のチュンチュン・ワジュディ組（インドネシア）が優勝したわけですが、やはりスピードが違うといった感じでした。

準々のときのイギリスペアはどちらかというと、スピードのあまり速くないほうだったのに対し、インドネシアペアは、猛烈な勢いでやってくるので、全然ベースがつかめず、簡単にやられてしまいました。」

大会前から、ベスト4はねらっていたのかどうか……。

「まあ、プログラムを見たときに、一つ倒せば、いけるかなとは思ってたけれども、一回戦から一つ一つが目標でした。ただ、三回戦で、イギリスナンバーワンのスチュアート・タルボット組に勝ったときに、これならベスト4にはいれるな、と思いました」

スチュアート・タルボット組は、昨年の本大会で、ベスト4にはいっており、強豪ペアであった。それを倒しての健闘だから立派なものである。体調のほうも、デンマーク選手権ではよくなかったものの、全英選手権にはいると快調になっていたという。

若手といっているうちに、栂野尾選手も、今回の遠征では、池田選手に次いで年長となってしまったが、外国のチームについての感じをきいてみた。

「ひと口にいって、各国とも若手を連れてきています。スウェーデンも、インドネシアもホープと目されている選手を出しています。マレーシアなどは、P・グナランが最年長といったぐあいです。デンマークも、先日来日したF・デルフスよりもさらに若手を連れてきています。

そして、試合には出さないまでも、見学させているようなケースも多く見られました。

プレーについては、もっとわれわれは速い球に追いついていくようにしないといけないと思う。打球そのものも速いし、またタッチが速いので、もたもたしていると、みんな前で処理されてしまう」

練習から、この点は気をつけていなければならないことだという。そして、できることなら中国の速いプレーともっと交流したいということである。

インドネシアでもハルトノに次ぐ若手が台頭しているというし、日本としても、若手の育成が急務といえるのではないだろうか。

最後になにかエピソードをというと、

「これといったことはなかったけれども、二日目だったと思いますが、在英の邦人から試合後夕食にさそわれたことがあるんです。招待して下さるのはもちろんありがたいですが……」

と、あとは何もいわなかったが、ご承知の方もいると思うが、全英選手権というのは夜間試合が行なわれるため、試合が終了すると、すでに十一時をすぎたりする場合もある。

やはり選手のためを思えば、もう少しの配慮がほしいところ。

とにかく、劣勢の続く日本男子にあって、奮戦、全英選手権でベスト4入りというのは、大いにたたえるべきである。

若手の選手も、池田・栂野尾組を乗り越えて、世界へはばたいてほしいものである。（S）

実戦教室 〈第3回〉

をねらう のために＝

小島一平

今回は**基礎的なシャトル打ちの練習法**について書きましょう。

❶ハイクリア

初心者が、最初に心がけるストロークで、まず第一に注意すべき点は、相手のバック・バウンダリー・ラインへコントロールよく正確に打つことと、相手の打球でアウトになるものは必ず選球し、選球眼を身につけることです。

このストロークは攻撃ではなく、守備というか、自分が不利になった場合に、自分の体勢をたて直すために用いるもので、要するに、飛行時間がどのストロークよりも長いので、それだけホーム・ポジションへ戻るのが楽になります。

試合が長くなればなるほど、ハイクリアの占める重要性は、おのずと大きくなります。ということは、疲労してくるとどうしても、スマッシュを多用できなくなり、スピードのある攻撃を展開することができなくなってしまいます。

しかし、中国の選手の教訓をとれば、ハイクリアを最後まで多用することなく乗り切れる体力があれば、それが理想的なのですが、これはハイレベルの選手にあてはまることであり、まず当初述べたように、どんな体勢になっても、コントロールよく返球できるように心がけるべきです。

そして、打った瞬間、必ず前方へ体勢を向けることを実行してください。ですから、ハイクリアの練習をする場合、定位置で止まって打つのではなく、つねに動きを入れることです。

❷ドリブンクリア

攻撃に用いるストロークですが、少しでも高さをまちがえると、逆に自分が非常に苦しい体勢に追いこまれてしまうものですから、注意が必要です。

相手の身長はどうかということを頭に入れて打ち、ハイクリアよりも、いっそう速くホームポジションへ戻ることが必要です。

ドリブンクリアの応酬は、非常に体力が消耗しますし、コントロールをつけることも、ハイクリアに比べて、さらにむずかしいものです。

そして、ストレートに打つことよりも、クロスに相手をゆさぶることが非常に効果的です。しかし、そのためには、自分がつねに十分な体勢になっていないと、逆に反撃を受ける結果になりますから、この点をよく注意して練習してください。

❸ドロップショット

まず球足の長いドロップショットは効果がないので、相手のコートのサービスラインよりネットぎわに落とすように心がけ、しかも、できるだけネットに近く落とすように練習することです。

相手を前後にゆさぶるには欠かせないストロークであり、技術が上達すればするほど、ネットインが一試合に一回や二回はでてきて、非常に有利にゲームを進めることができます。

練習においては、パートナーと交互に打つと、動きがはいり、効果的です。つまり、Aがドロップショット、Bはそれをヘアピンショットでネットに返す、Aは前に走ってこれをBのバック・バウンダリー・ラインへ返す、Bはこれをドロップショットで返す……というぐあいにやってみてください。

体力的にそれほどきついものではなく、むしろ楽なのですが、しっかり気合いを入れて、集中力をもってしなければ、ミスをくり返して、無意味なものとなってしまいます。

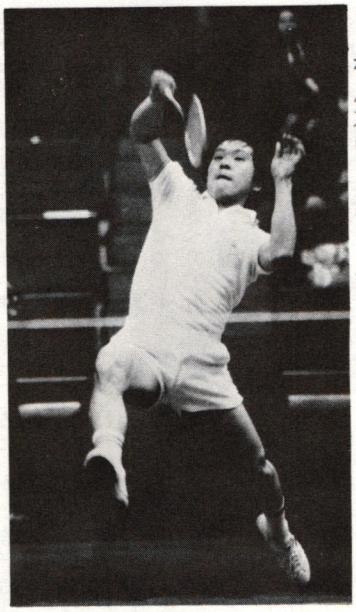
❹カット

フォアから相手のフォアへ、バックからフォアハンドで相手のバックへ切るというストロークで、中国の選手が、非常に多く用いたものです。

相手がホームポジションへ戻る前に、ハーフスマッシュ、もしくはスマッシュと同じ速さで落とすものです。

フォアから打つ場合は、比較的コントロールをつけやすいのですが、バックから打つほうは、他のストロークとは逆に振ることになるので、非常にむずかしいものです。

私は、これを一つのウイニング・ショット（決め球）としています。この場合、いずれも、つねにストレートに打つとみせ



基本を完全にマスターせよ

●連載

体当たり＝インターハイ中高校生

●*Ippei Kojima*

かけ、打つ瞬間に手首を逆に返して、クロスへ振り切ることです。

もちろん、ドリブンクリア、ドロップショットよりも、さらに速くホームポジションへ戻らなければなりません。

❺ドライブ

これは、ストレートとかライナーなどとも呼ばれているストロークで、ダブルスにおいて多用するものです。

とにかく相手からのリターン（返球）が速いので、ラケットを振り切ったら、ただちにラケットを上げて構えることであり、手首によって打ちこなさないことには、むずかしいものです。

というのは、腕全体で大振りをしていたのでは、次の構えるという動作にうつるのが遅れてしまうからです。

手首を強くすることにより、コントロールのよいドライブを打つことができるし、また浮いた球、沈んだ球、ボディめがけてきた球など、ひと口にドライブといっても種類が多いので、そのつど、体をウィービングすることによって、タイミングをとってください。

ウィービングというのは、ボクシングの選手が、相手のパンチをよけながら、自分でパンチをくりだすために、体を左右に振ったり、しゃがんだりすることです。ボクサーの動きにも参考になることが隠されているのです。

❻スマッシュ

ストロークの中で、スマッシュはもっとも攻撃力のあるものですから、まず、速いスマッシュを打つことを心がけるべきです。

そして、一発だけで終わってしまうことなく、二発、三発と連続してのアタックができれば理想的です。

しかし、もっとも疲労しますし、バランスもくずれるので、足腰はもちろんのこと、体全体の体力がないことには迫力のあるスマッシュを打つことはできません。

それに、腕・手首で打つスマッシュは、スピードに限界があるので、腰を使って体全体の力を打つ瞬間に集中できるようにすることです。

速いスマッシュを打つことは、フォームがよいことで、疲れないことに通じるのですから、フォームの悪い人は、最初のうちに直しておかないと、後で苦労します。

練習終了後、古くなったシャトルを上げてもらい、連続スマッシュをすることです。

私の経験からいいますと、やはり体力に自信をもっている場合は、スマッシュを打つケースが多いようで、それだけ、常に積極的に攻撃をしかけることができ、有利になるわけです。

中国の選手もそうだったように、とにかくスマッシュの強化は、強い選手になるための、第一の目標ですから、特に中、高校生の皆さんは、鋭く、速いスマッシュを、一日でも早く身につけるべきです。

❼プッシュ

パートナーがネット前に立ち、プッシュする。それをすべて返球する。この基本練習が上手にできる人は、非常にレシーブが良い人だといえるでしょう。

ネットぎわへ、浮かすことなく返すのです。打ち方は、手首を返せることがよく、また、相手の打球は、ドライブ以上に速いのですから、当然手首の力の向上が必要になってきます。

プッシュをする方は、ネットへピタリとついていては、左右へかわされた球を返すことができませんから、サービスラインのところで構え、打球によって前に突っ込み、左右に走るようにすることです。

❽ヘアピンショット

ヘアピンショットが上手になると、試合の展開が非常に有利になることは確かです。

ということは、ネットインはもちろん、ネットすれすれにはいれば、相手はまたネットに返すが、浅くロビングを上げるしかできなくなり、次に攻撃するのが非常に楽になるからです。

私はバック側のヘアピンショットが得意で、自信をもっています。フォア側は、腕が伸び切り、そのうえラケットがあるために、それだけ目が離れてしまいます。

その点、バックは、腕が交差するかたちになりますから、目からの距離が短いからです。そして、訓練することによって、ネットから遠く離れたところでシャトルをとらえても、すばらしいヘアピンショットを入れることができるようになります。

以上、八種類のストロークの基礎的な練習方法について述べてみましたが、基本をおろそかにしては進歩が望めないばかりか、悪いクセがいったん身についてしまうと、それを改めるには大変な苦労を要します。

ですから、この一つ一つのストロークを十分に練習して、完全にマスターしてください。

（次回は、コートワークについて書いてみましょう）

私の歩んできた道

〈第二回〉

高校時代は、インターハイのタイトルをとることができないまま、日本女子体育短期大学へ進学しました。

そして一年生のときの、全日本総合選手権大会（昭和三十七年度・横浜）で念願の全日本のタイトルを獲得することができました。この大会では、ダブルスも諸田みや子さんと組んで優勝することができました。

翌年の岐阜において行なわれたときも、決勝へ進出し、連続優勝を狙っていました。

ところが、またまた皮肉な運命で、決勝を棄権して東京へ戻らなければならなくなってしまったのです。

というのは、ちょうどこの決勝の日が、大学の卒業式と重なってしまい、しかも、私が卒業生総代として式に出席しなければならない、という学長命令を受け取ったのです。

このときも、皮肉な運命だなと思いながら、決勝を棄権して東京へ帰ってきました。

大学のときの思い出というとこんなことがありました。私が大学一年の時でしたが、アジア大会へ出場した人たちの報告会に出席しました。この年のアジア大会へは、秋山さん、椙野尾さん、橘さんが出場したのですが、この三人の人たちの報告を御殿場の研修センターで聞きながら、「海外遠征なんて、私には夢みたいな話だなあ、自分にはあまり縁のないことだ」などと思っていました。

このときは、もちろん自分が将来海外へ出ることになるなどとは思ってもみませんでした。

そして、卒業して二年目にたまたま、海外遠征という好運がめぐってきたのです。

このときは、東南アジアへ行くということでしたが、前年の全日本総合選手権で、一位、二位だった横山満子さんと私が選ばれました。監督は森友さん、男子選手は堺さん、宮永さんでしたが、これが私にとっては初めての遠征でした。

場所はインドネシアのジャカルタでしたが、私は一回戦で中国選手とあたり、簡単に負けてしまいました。それこそ初めての海外遠征ということと、ジャカルタという暑いところだったために、何が何だかわからないうちにコロッと敗れてしまいました。

このときに、インドネシアの女王といわれたミナルニも出場していましたが、このミナルニもやはり中国の選手に敗れていましたので、中国選手は強いなあと思ったのを覚えています。昨年日本にも来た侯加昌選手も出場していて非常に強く、たしか優勝したと思います。

インドネシアの代表的な選手で、一九五九年の全英選手権男子シングルスで優勝したタン・ジョー・ホックもやはり中国選手に敗れていました。

私は、そのとき一回戦で負けたのですが、敗者復活戦をやり、インドネシアのインタン選手とあたりました。このインタン選手は前回のユーバー杯にも出場していましたが、当時はまだ十七歳でした。

このときにもう一つびっくりしたことは、インドネシアの人たちの熱狂的な声援ぶりと、その雰囲気です。

ジャカルタでの試合が終わったあと、タイ、マレーシアと転戦したのですが、そのときはもう慣れたせいもあって、地元の選手たちと対戦して、ずっと勝つことができました。

やはり、自分にとって最初の海外遠征ということで、印象も深いし、また、そのときは夢のような気持ちでした。そして、今回かぎりだろうと思って、何でもみてやろうということで、あちこち歩き回ったりしました。

そして、日本へ帰ってきたころから、ユーバー杯というものが話題にのぼりはじめ、その選手も決まってきました。それに伴って合宿なども行なわれるようになりました。

ところが、そのころはユーバー杯がいったいどんなものなのかもわからないし、とても勝つとか優勝するなどということは考えにも浮かんできませんでした。ただ、合宿は、毎日オールジャパンをやっているようなもので、しのぎをけずったのを覚えています。

そして翌年（一九六五年）の二月にアジア地区の予選出場のためにインドへ行きました。それがユーバー杯への公式の第一歩ということでした。

このアジア地区予選へいたるまでの合宿の思い出というと、ひと口にいうと非常に楽しく、小宮監督、福井コーチと全選手がよくまとまっていました。

ただ練習のほうは、毎日カウントをとるきびしいものでした。

アジア地区予選で優勝してユーバー杯への出場権を得たときにまず思ったことは、インドネシアには勝ちたいということです。というのは、インドネシアの選手たちは見たことがあったし、私たちもインドネシアが相手なら何とかなると考えていたからです。

そして、いよいよユーバー杯（世界女子選手権大会）参加のため、一九六六年五月、ニュージーランドに行くことになりました。

ニュージーランドに着いてからも、決勝までは、各地に分か

無欲でユーバー杯を獲得!!



●中山紀子

れて試合をしたために、自分たちと対戦した国の人以外の選手とは全く顔を合わせる機会がありませんでした。

私たちはまずインドネシアと対戦しましたが、そのとき、会場にカップがかざってあり、まさかそれがユーバー杯だとは思わなかったのですが、それが本物だと知ったときに、私たちは、さわらしてもらおうよ、ということで、それぞれさわったりしました。

そのユーバー杯を見ると、台の部分に過去三連勝の、アメリカのネームプレートがつけてあり、私たちは冗談に、次は日本のプレートをつけようなどといいあっていましたら、アメリカの監督が〝オー・ノー〟といったのを覚えています。

自分たちもまさか優勝できるなどとは思っていませんでしたから、そんなことをいっていたものです。

そしてまずインドネシアに勝って、次にイギリスとオークランドで対戦することになりました。その当時イギリスは、アメリカより強いだろうというので、その時も全然勝てるとは思わず、選手をみても、むこうは一八〇センチもあるような人ばかりで、とても相手にならないと思っていました。

ところが、自分でシングルスを始めてみると、何か、あ、これは勝てそうだなという気がして、事実ポンポンと三つ取ってしまいました。しかし、ダブルスになったらそうはいきません。さんざん苦労してようやくダブルスを一つとり、4−3でイギリスに勝ちました。

この時になっても、まだアメリカがあり、アメリカにはジュディ・ハッシュマンがいて、とてもかなうわけないと思っていました。そしてアメリカにも挑戦するためウェリントンへ向かいました。

ウェリントンでは試合前にレセプションがあり、ちょうど私の向かい側の席がハッシュマンだったんです。ところが、彼女は風邪をひいたとかいうことで姿を見せませんでした。おそらく、日本なんかにタイトルを渡してたまるかというファイトをもやしていたからだと思います。

いよいよ試合が始まったわけですが、私は試合前に、みんなジュディには勝てるわけがないといっているけれども、勝てないのだったら一本でも多く取ってやろうと思っていました。

そして、試合になってみると確かにジュディは強い選手で、今までに対戦した人とは違っていました。しかし、私も必死にくいさがり、とにかくどんな球がきても全部返してやろうと思って走って、拾いまくりました。

そうするとジュディがあわてはじめたんです。まさか、こんなに抵抗されるとは思ってもいなかっただろうし、私のようなタイプの選手とはやったことがなかったのでしょう。次第にあせりがでて、それがプレーにあらわれてきました。

ジュディというのは非常に短気な性格で、自分の思いどおりに試合が運ばないと、イライラしはじめ、それが顔にでてしまうのです。

私は、これならいけると思っていたところ、せり合いから1ゲームをまずとることができました。第2ゲームにはいると、彼女はますます怒ってしまい、どんどん自分からミスをするようになってしまいました。

私の一方的なリードで進み、たしか7−0くらいまで引き離したところで、ちょっとシャトルが悪くなったんです。そのあたりからジュディは追い上げてきて、私はなかなか得点することができなくなってしまいました。シャトルはさらに悪くなってきていたし、このまま我慢して続けていては危いと思って、シャトルの交換を要求しました。

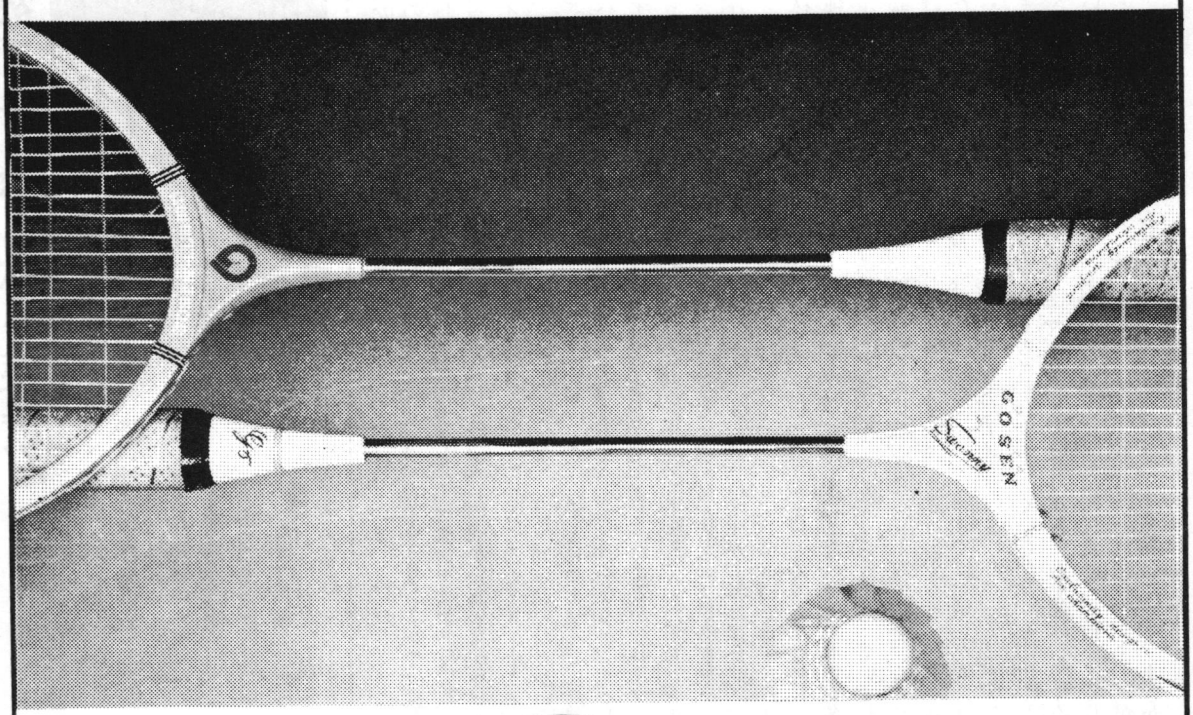
ふつう国際試合などですと、よほどのことがないかぎり、オーケーというのですが、彼女はノーといって応じないんです。しかたがないから審判のところへ持っていくと、審判も、ジュディには一目おいているので、そのまま続けろというんです。

やむをえず続行したところ、やはり私に不利なんです。そして9−7か10−7まで追い上げられ、このままでは反対に逆転されてしまうし、このままいいなりになっているわけにもいかないと思い、審判に、このままのシャトルではプレーできない、もし続けろというのなら、私はやめる、といいました。そうして、ようやく審判もシャトルの交換を命じ、私はストレートでジュディに勝つことができました。これで私たちはすっかり気をよくしました。当時、ジュディに勝てる者なんていないはずはないといわれていたのに勝ってしまったのですから。続くシングルスも二つ勝ち、ダブルスも最初は落したものの、第二ダブルスをとり、アメリカからユーバー杯を奪ってしまいました。

ところが、勝ったものの、控室で、「ああ勝ったんだわ……勝ったのね」というふうに全然ピンときませんでした。ユーバー杯を渡されても、重いなあと思うくらいでなかなか実感はわきませんでした。

やはり、優勝できたということは、本当に無欲でいたからだと思います。無欲の勝利というのは、まさにこのことでしょう。

精緻。俊敏。この確かな手応え。
ロング・テーパード・シャフト。



LUBIRD & SWANNY

Gosen Badminton Racket



特殊合板の力強いフレームと、
従来のものよりさらに長くなった
クローム・テーパード・シャフトの強靭性
が強力なバイブレーションを生み出します。
ゴーセン・ルバード、スワニーのロング・シャフトコンビ
が逞しいラケットワークを可能にし、世界のバドミントン
界を陵駕し、そのシャープで逞しい手応えを披露します。

●No.B65ゴーセン・ルバード〔フレーム〕……¥3,800
●No.B60スワニー〔フレーム〕・タオルグリップ付…¥3,800

株式会社ゴーセン
本　　社・大阪市東区豊後町4　☎(06)942-5816(代)
東京営業所・東京都台東区鳥越1-26-1　☎(03)862-6576(代)

読者と編集者

■本誌第50号誌上でお願いいたしましたアンケートに対し、多くの方々より回答をいただきました。

四月十五日現在の集計結果が出ましたので発表いたします。

質問①本誌の購入方法

年間購読＝94％
試合のたび＝3％
ときどき＝3％

質問②本誌の購入は

個人＝91・6％
会社・学校のクラブ＝8・4％

質問④本誌の定価は

ちょうどよい＝66・8％
安い＝27・2％
高い＝6％

質問⑤実際に自分でプレーを

今続けている＝87％
以前やっていた＝9・9％
今後やりたい＝3・1％

質問3の、本誌45号から50号までの間でおもしろかった記事、つまらなかった記事は次のとおりです。

★おもしろかったベスト3

1位＝目で見る技術講座・中国三選手に学ぶ（第50号）
2位＝第一回日中競技大会特集（第48号）
3位＝底辺を支える人たち（第45号）、続・中国の実力とその周辺（第46号）

★つまらなかったワースト3

1位＝日中大会にひろうスナップ（第48号）
2位＝第一回日中大会をふりかえって（第49号）

質問⑥の編集部に対するご意見、ご希望のなかで、いくつかを発表いたします（敬称略）。

★カラー写真をたまにのせてほしい、選手の日常の様子を知りたい（吉祥寺・増田はるみ・16才）。

★現在クラブをつくってやっていますが、同程度のクラブと交流したり、一流プレーヤーのコーチを受けたりしたいので、方法を教えてほしい（埼玉県・池田寛・45才）

★トッププレーヤーへのインタビュー。早く本来のペースにもどしてほしい（三郷市・伊藤高義・18才）

★トレーニングに対する「栄養と健康」のような記事を（長崎県・秋山二三夫・25才）

★バドミントン仲間の輪が広がるように文通コーナーをもうけてほしい（杉並区・和久真一）

★技術講座のページをふやしてほしい（北海道十勝郡・田子紀代子・16才）

★毎回遅れずに（横浜市・中村実・32才）

★一ページ大の写真を毎月何枚か（刈谷市・村上清孝・19才）

★実試合における作戦を（茨城県結城市・所妥・16才）

★各中学・高校・大学・社会人の練習方法の記事を（江戸川区・飯塚義典・16才）

★試合の予定スケジュールをのせてほしい（大田区・池沢かおり・15才）

★技術講座の充実を望みます。また、とくに指導法を期待します（三鷹市・飛鳥井雅孝・22才）

★トッププレーヤーの方々のおいたちや趣味などを知りたい。（北区・山口典子・16才）

★市やその他のところにあるバドミントンクラブを紹介してほしい（行橋市・広門恭子・18才）

★バドミントンを科学的に心理的に、そして考える広場をつくってほしい（仙台市・柴藤昌幸・18才）

これらは、ほんの一部ですが、編集部一同、大いに発奮してがんばっております。今後も、どしどしご意見をお寄せください。

■先日の、第三回国際バドミントン競技大会の際に、入場者の方々にアンケートをお願いしましたが、その集計結果がまとまりましたのでお知らせいたします。数字はすべて回答数で割合を表わすパーセントではありません。

質問①本日の大会を何で知りましたか。

イ、報道関係＝七五
ロ、案内状＝四三
ハ、友人・先生等から＝一一七
ニ、ポスター＝二八
ホ、その他＝二〇

質問②今までにバドミントンの国際大会をごらんになったことがありますか。

イ、はい・一回＝五九、二回＝四七、三回＝三一、四回＝一〇、五回＝一九、六回＝五、七回＝二、八回＝三、数回（回数不明）＝一一
ロ、いいえ＝九七

質問③今大会の第一戦（東京大会）をごらんになりましたか。

イ、はい＝一〇五
ロ、いいえ＝一七一（うちテレビでみた＝五）
ハ、無回答＝一一

質問④＝今後国際大会の外人選手のメンバー構成はどのくらいがよいと思いますか。

男子一名＝一、二名＝一八、三名＝三九、四名＝八三、五名＝四三、六名＝三、男子のみがよい＝一
女子一名＝〇、二名＝一、三名＝三三、四名＝九二、五名＝四五、六名＝一六、女子のみがよい＝一

質問⑤あなたはどの選手のファンですか

（男子）小島＝一二二
本間＝三四
池田＝一三
銭谷＝一一
（女子）竹中＝一三一
相沢＝八五
湯木＝二五
中山＝七
（外国男子）デルフス＝三五
ハンセン＝二六
ハルトノ＝八
コプス＝二
（外国女子）ビューセコム＝三九
リュースケン＝九
ボストフ＝九
ツェドベリ＝四
陳玉娘＝四
（いずれも、上位四選手のみ記載しました）

質問⑥あなたは、いまクラブ、一般公開等でバドミントンを行なっていますか。

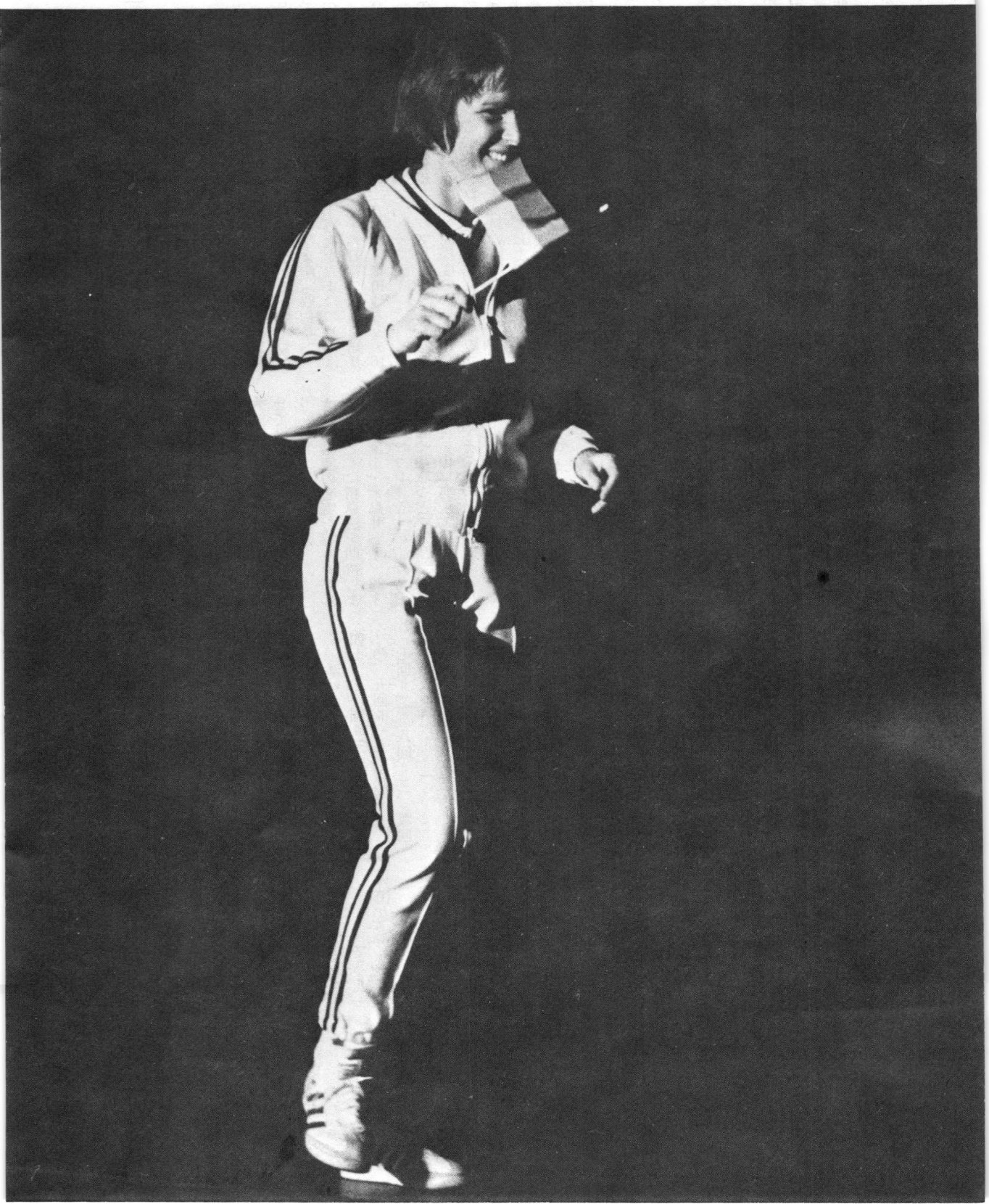
（ハイ）一般＝五六 中学＝五〇 主婦＝一二 小学＝一〇 高校＝八六 高専＝三 大学＝二二 その他＝四
（イイエ）＝三九

質問⑦あなたは、バドミントンの試合はどの種目が一番おもしろいと思いますか。

男子単＝四八
男子複＝七一
女子単＝二七
女子複＝一三七
混合複＝三二

ナイスショット・1

今回のグラフは，1973年から1974年にかけての各大会におけるスナップを特集しました．名づけて“ナイスショット”その1は，スポットをあびて入場するジズマン（西ドイツ）（1973.2.6　第2回国際女子大会）



ナイスショット・2

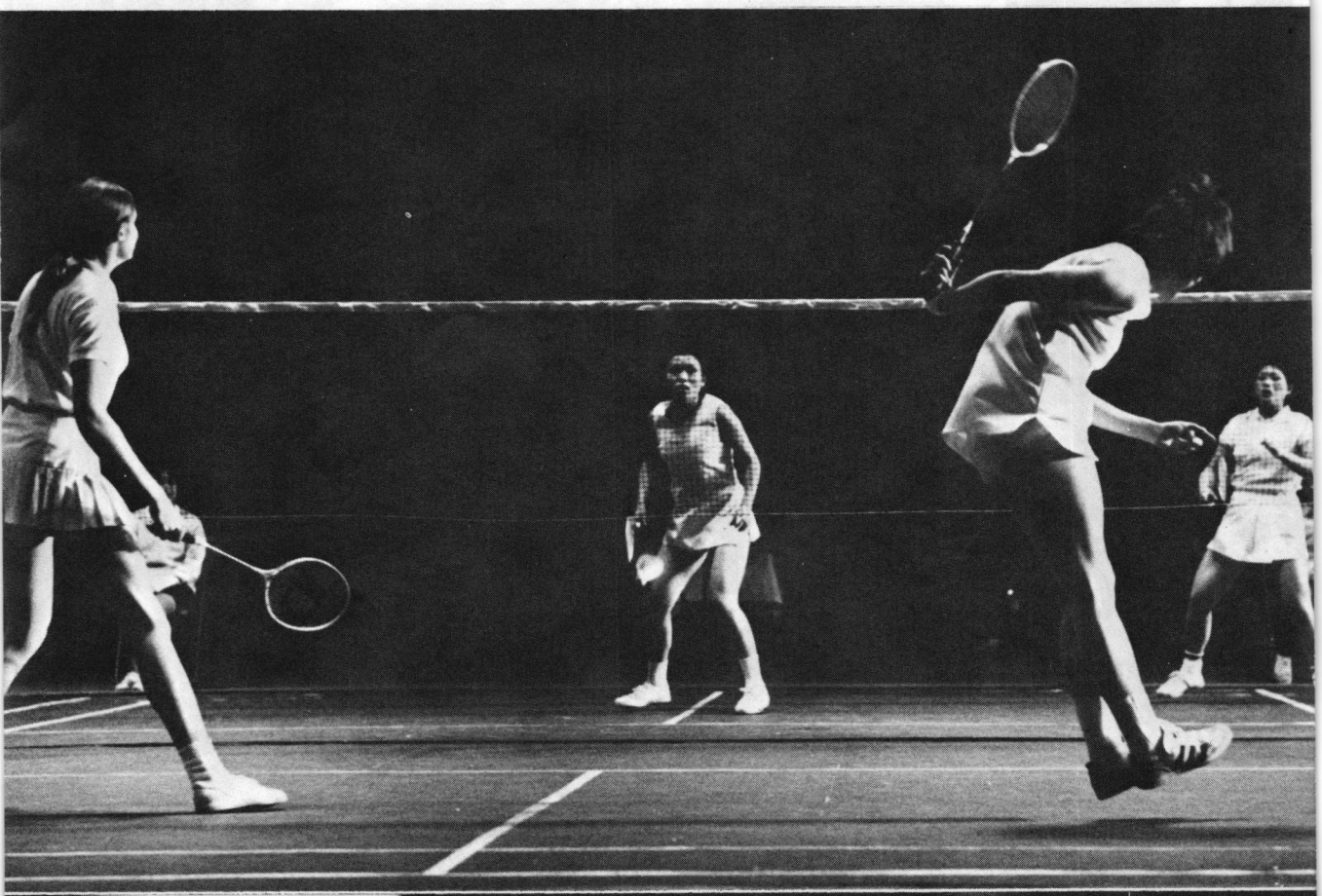
ショッピングにでかけた湯木とツェドベリ.
ツェドベリは昨年夏，イギリスの名プレーヤー，エリオット・スチュアートと国境を越えて結婚した.
花束と記念品を手ににこやかなヨーロッパチーム. (1973.2.4)

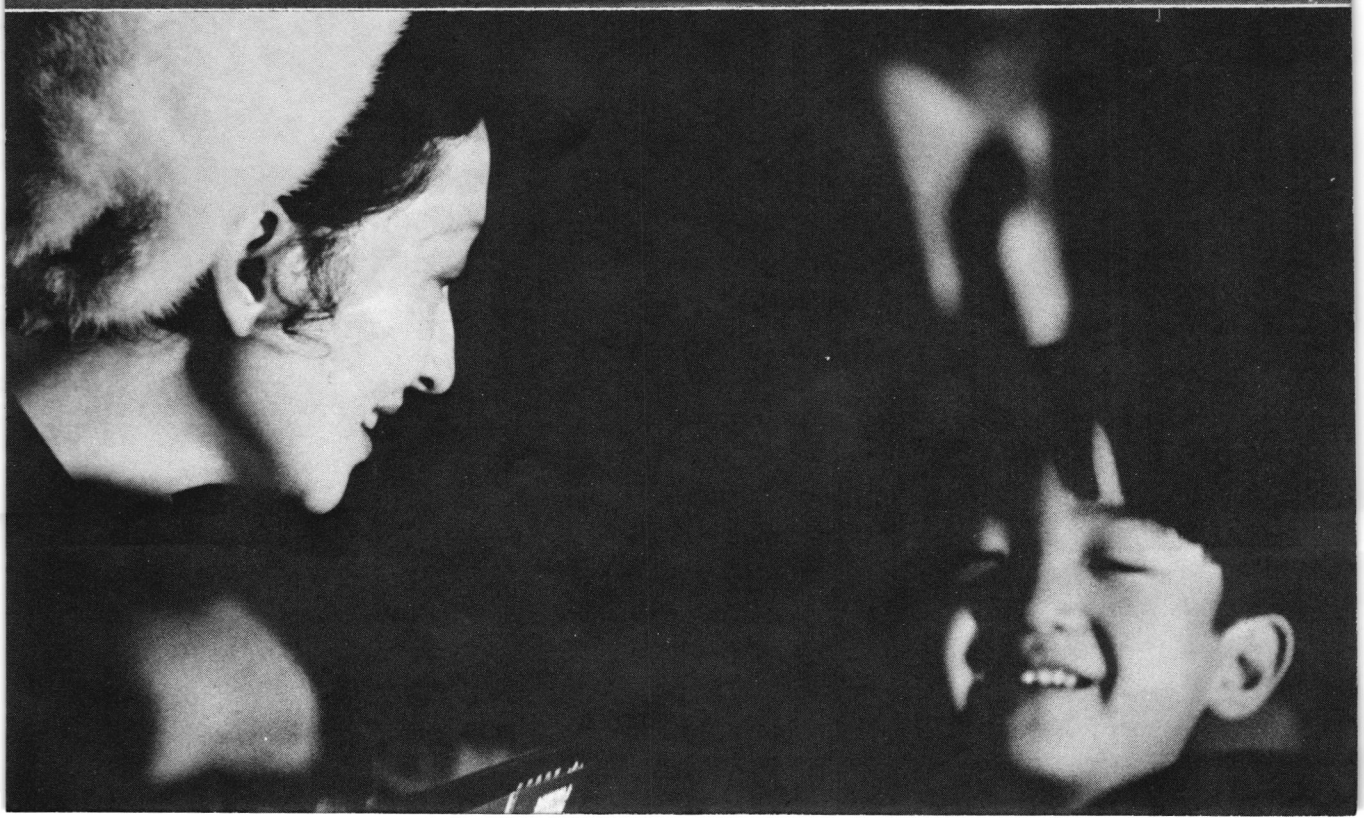




ナイスショット・3

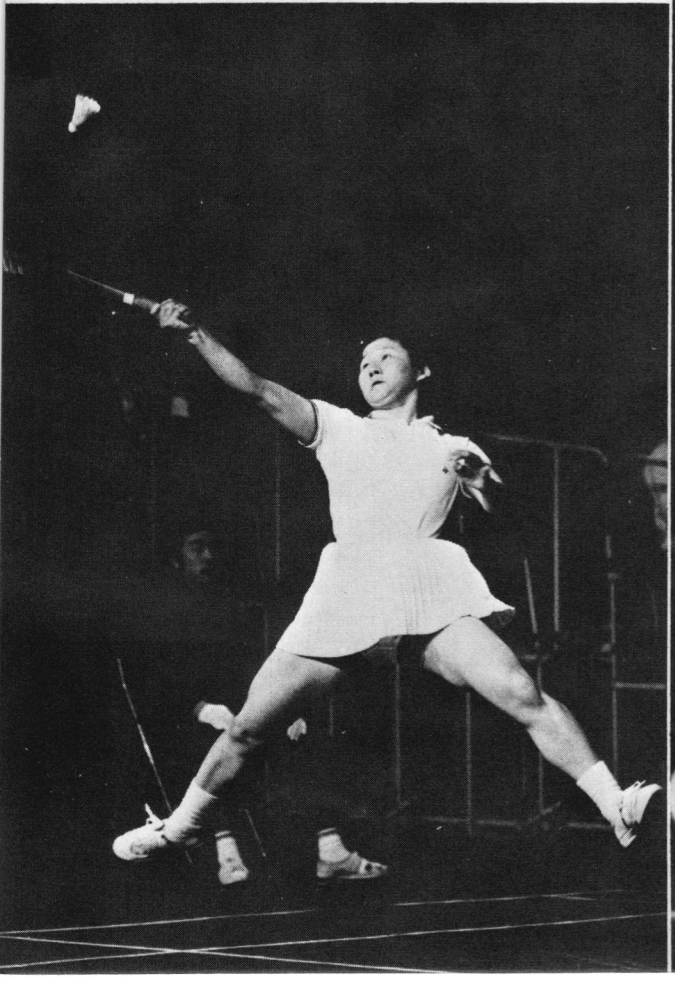
足長チーム，ギルクス・ジズマン組．新しい(?)バックハンドを見せるジズマン．美智子妃殿下も礼宮さまと観戦．（1973.2.6）

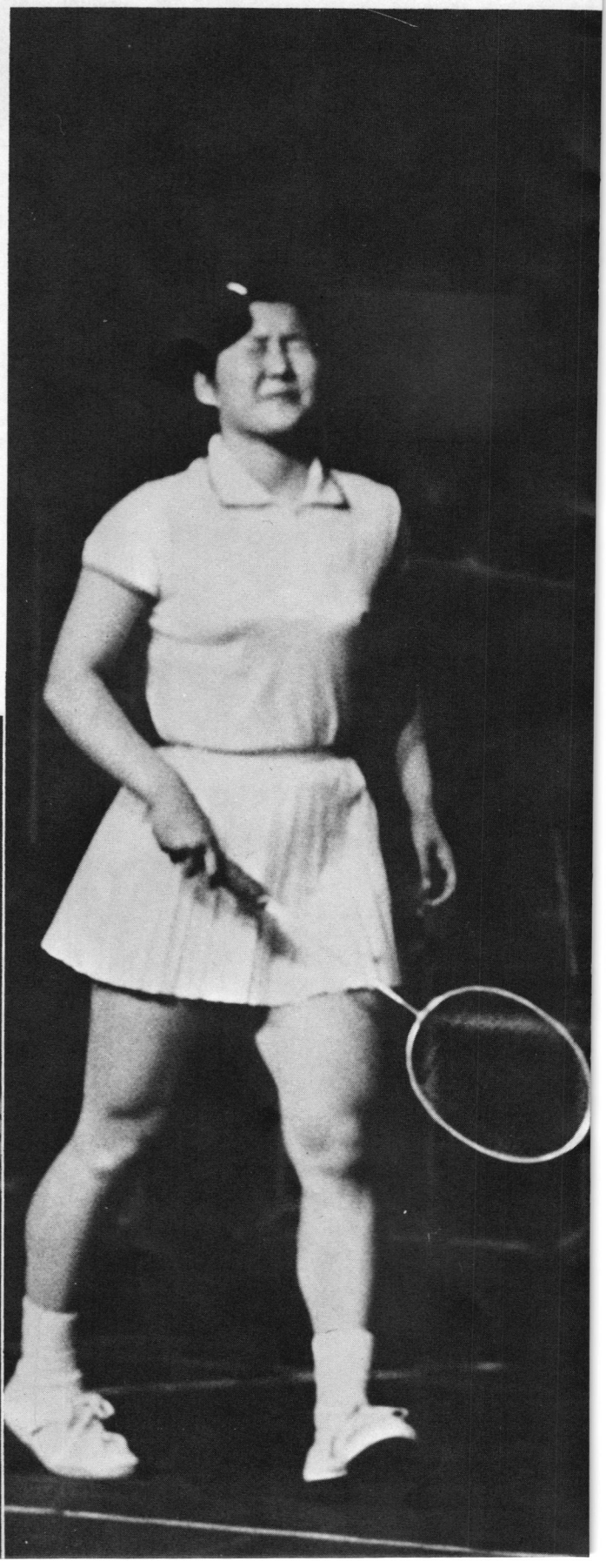




ナイスショット・4

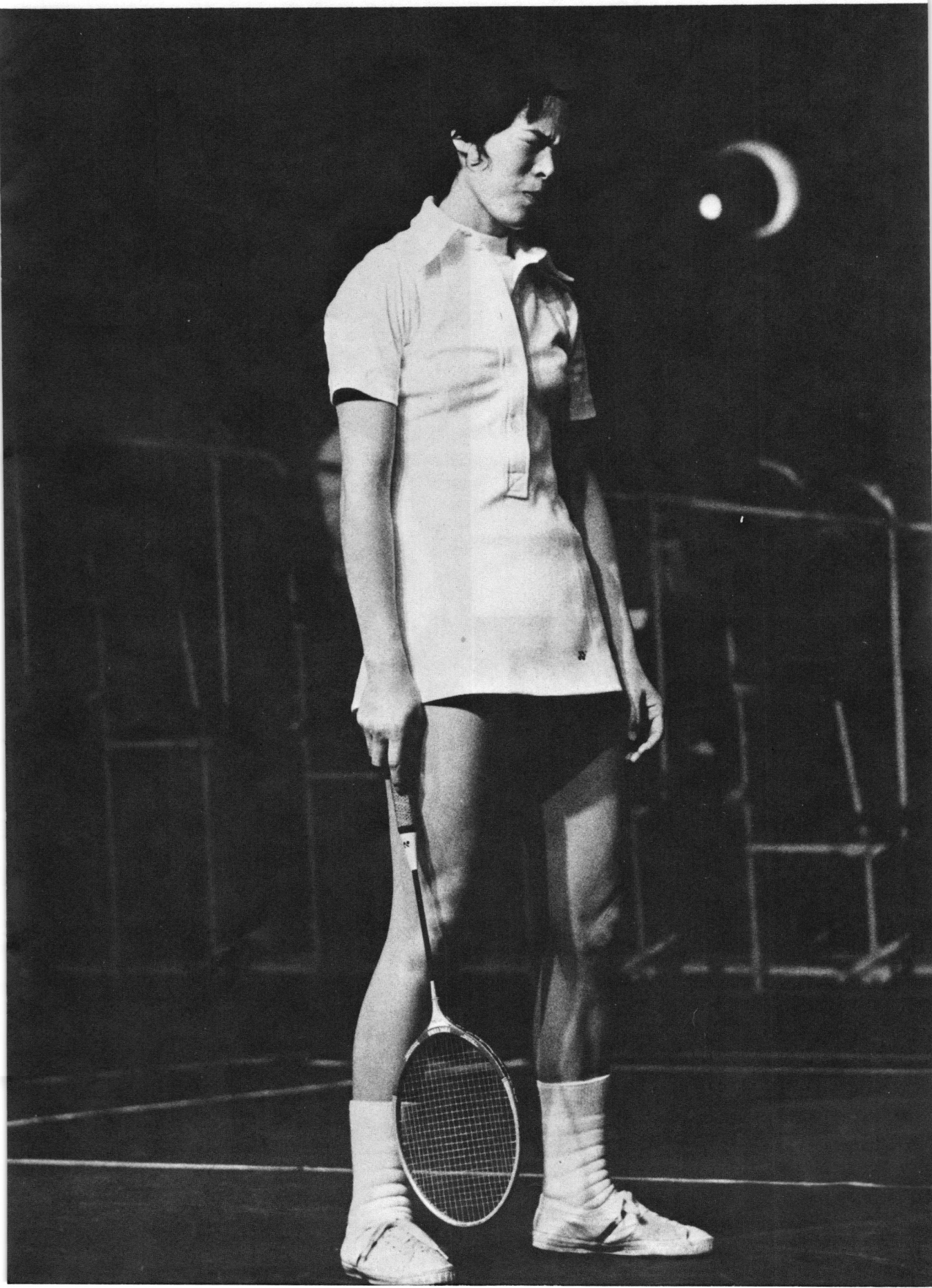
女子チャンピオンズ・トーナメントで張り切る秋本選手．健闘むなしく敗れたときの表情が印象的．（1973.3.4）



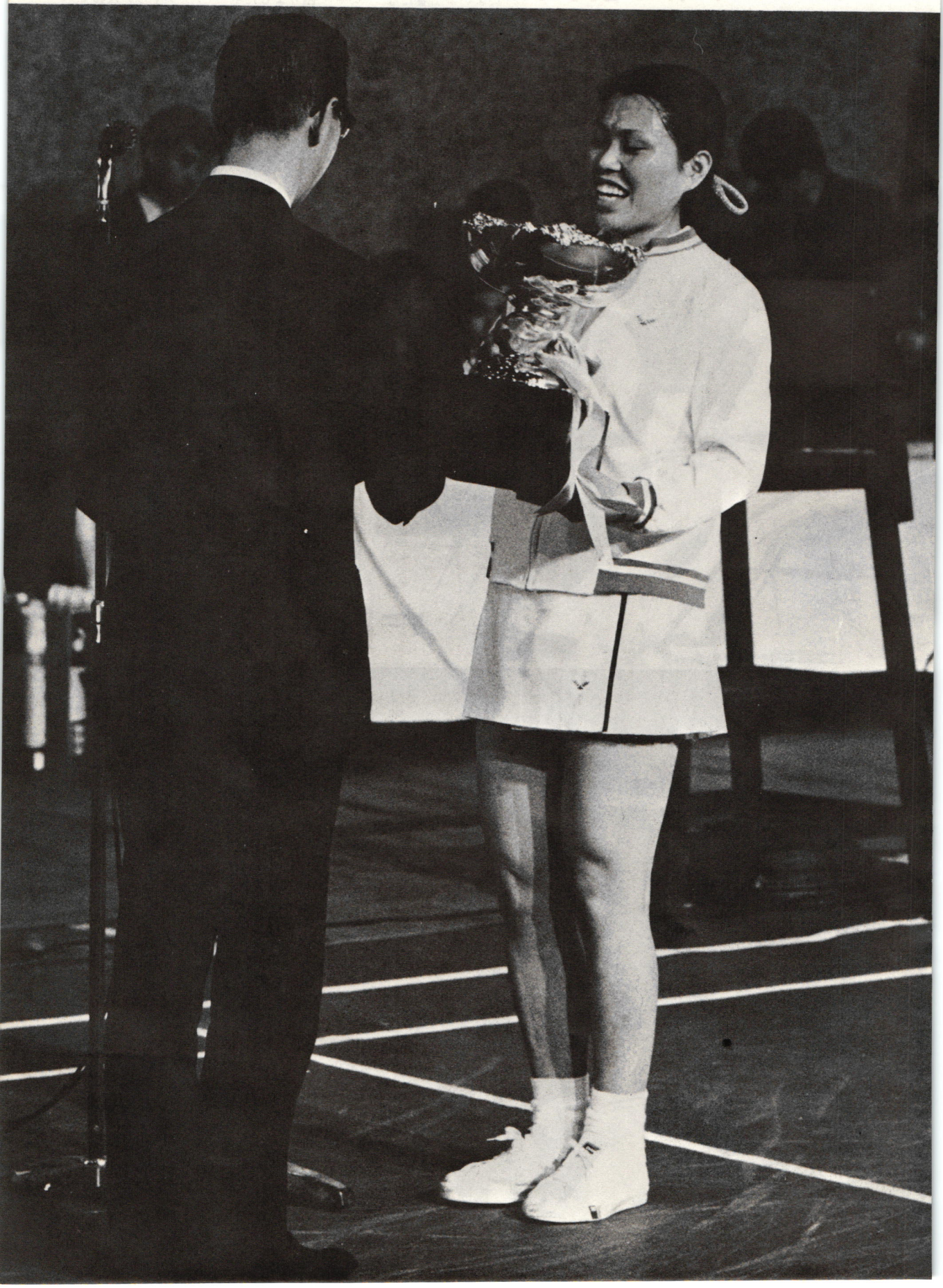


ナイスショット・5

竹中選手もときにはこんな表情をみせます．（1973.3.4）

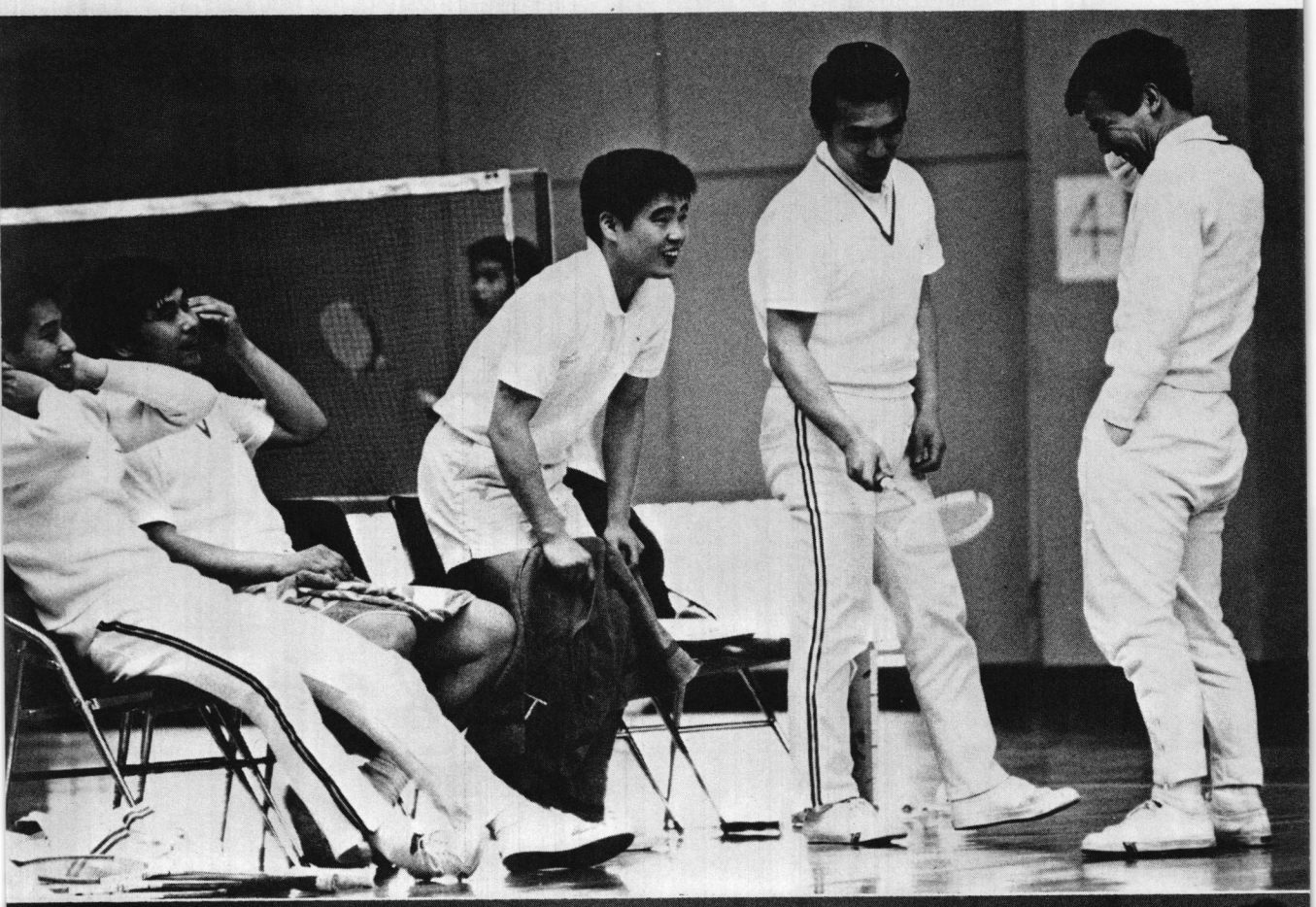


ナイスショット・6 優勝はいつもうれしいものです．湯木選手の笑顔．（1973.3.4）



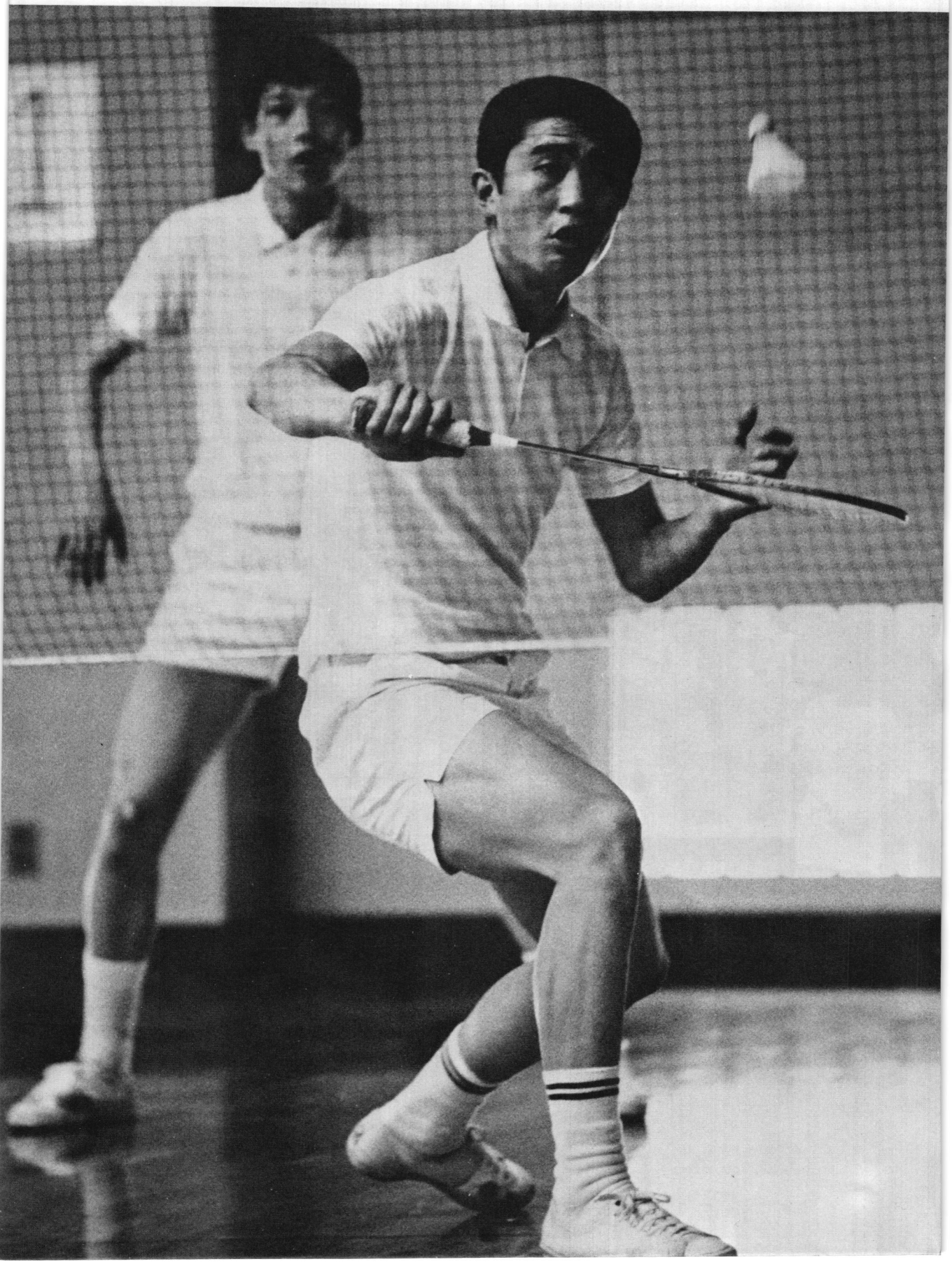
ナイスショット・7

全日本実業団・全日本学生対抗戦から……
“いよいよ出番だな”“いやー困りましたネ”“サーブぐらい入れてくれよ”“まいったなあ，堺さん”（1973.4.8）





ナイスショット・8 うまくはいるかな……
折井選手の心配そうな表情．後ろは松口選手．早大の若手ペア．
（1973.4.8）



ナイスショット・9

世界一長い歩行者天国でもバドミントンが．しかし，警視庁は渋い顔．（1973.7.10）

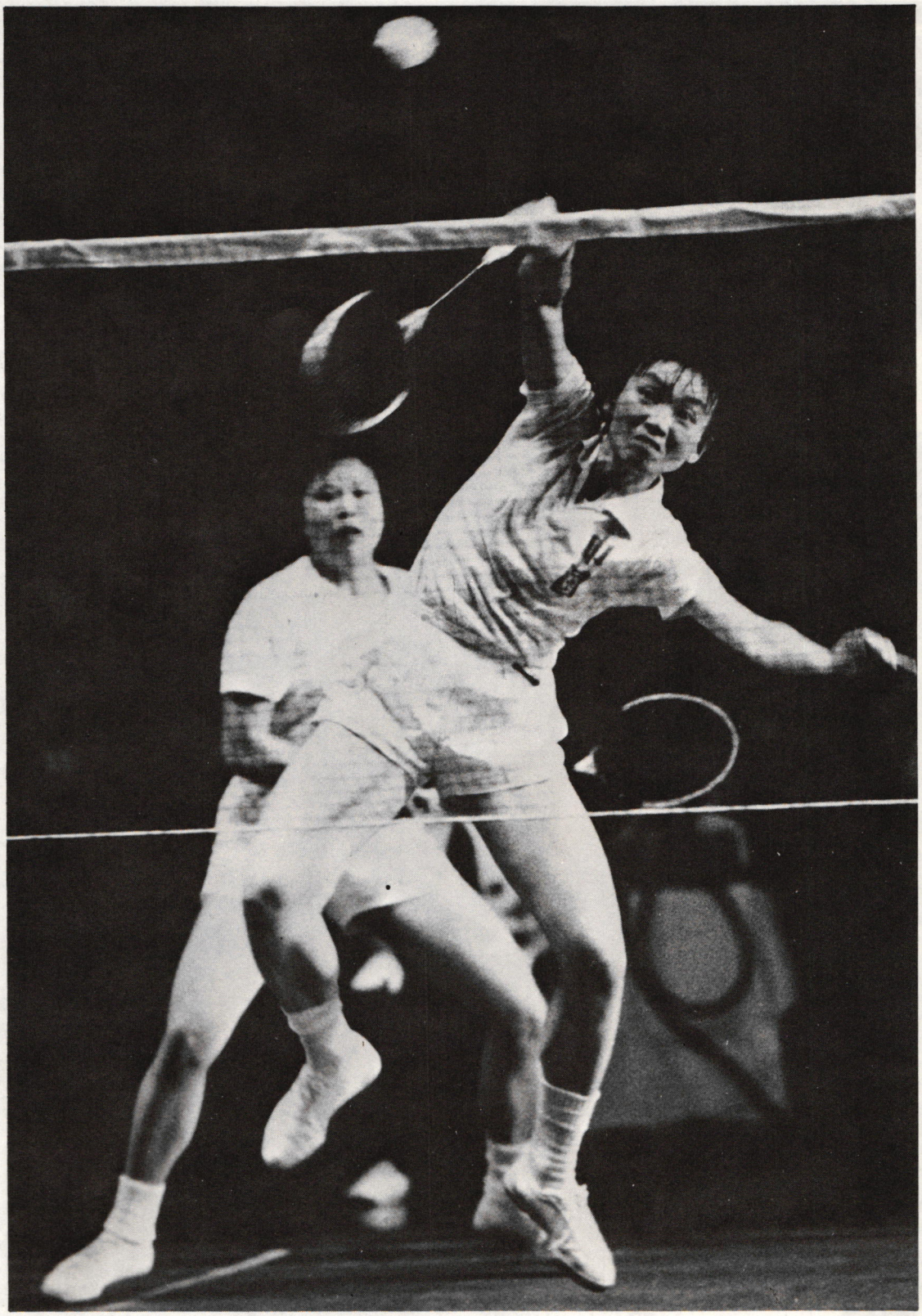


ナイスショット・10

ついに無冠の帝王・中国が来日.
ガッチリ握手する両国の女王，陳玉娘と湯木博恵. （1973.8.31）

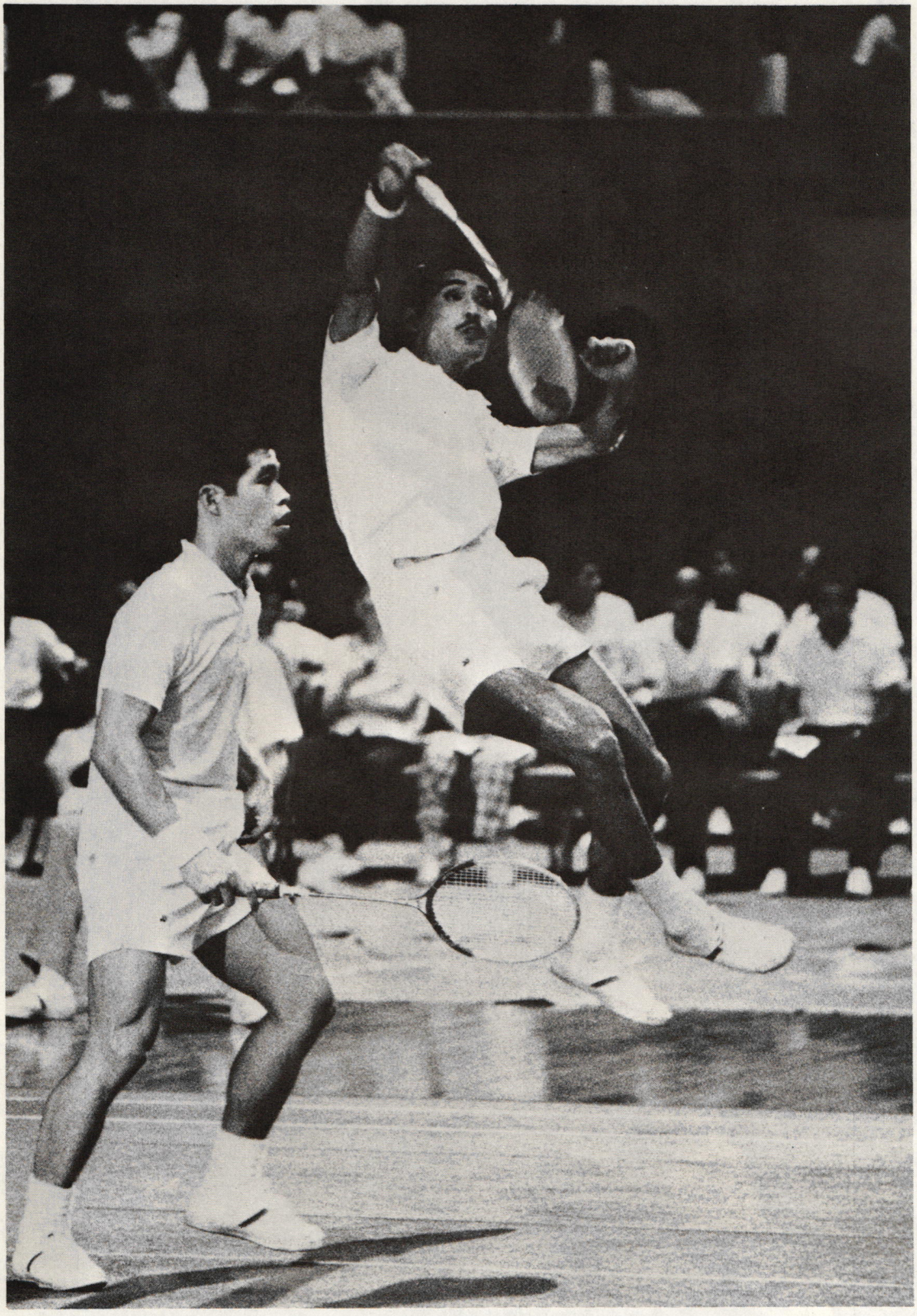


ナイスショット・11　林有雅選手の強烈なアタック　(1973.9.2)



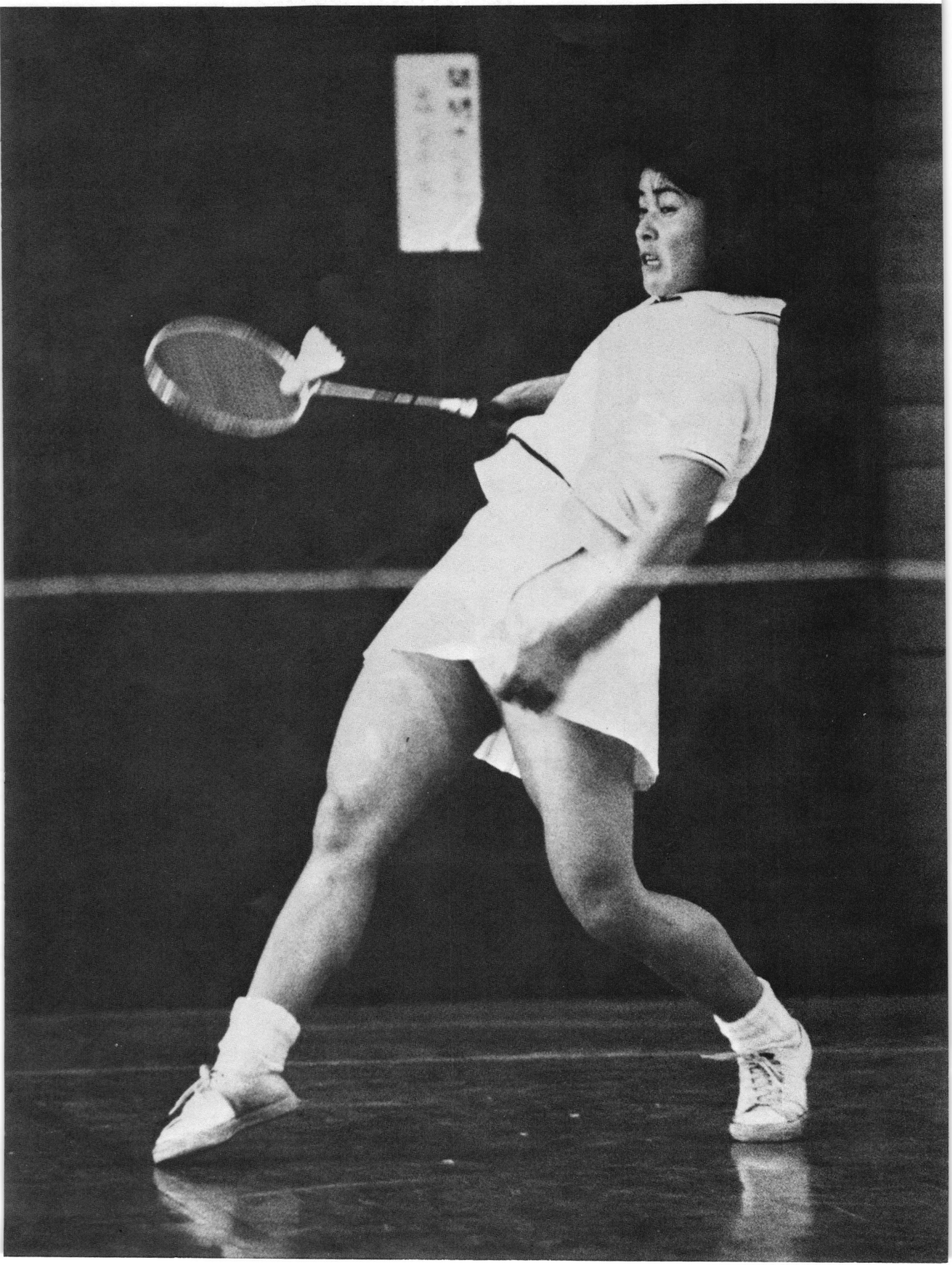
ナイスショット・12

栂野尾選手も負けずに猛烈なジャンプスマッシュ．ラケットのしなりぐあいをみてください．（1973.9.2）



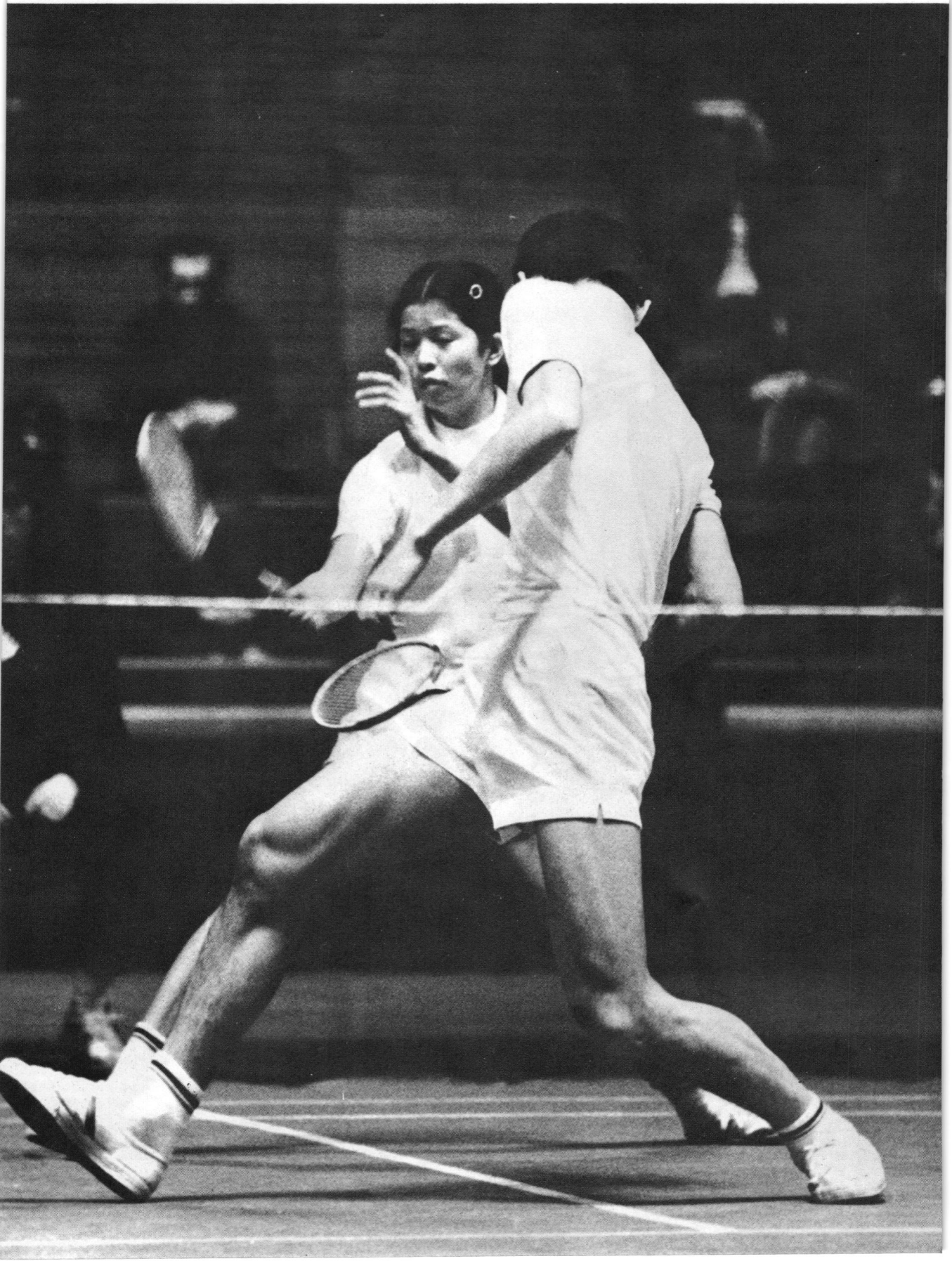
ナイスショット・13

苦しい!!
必死の防戦，門間千恵子選手（旧姓小片さん）．（1973.12.13）



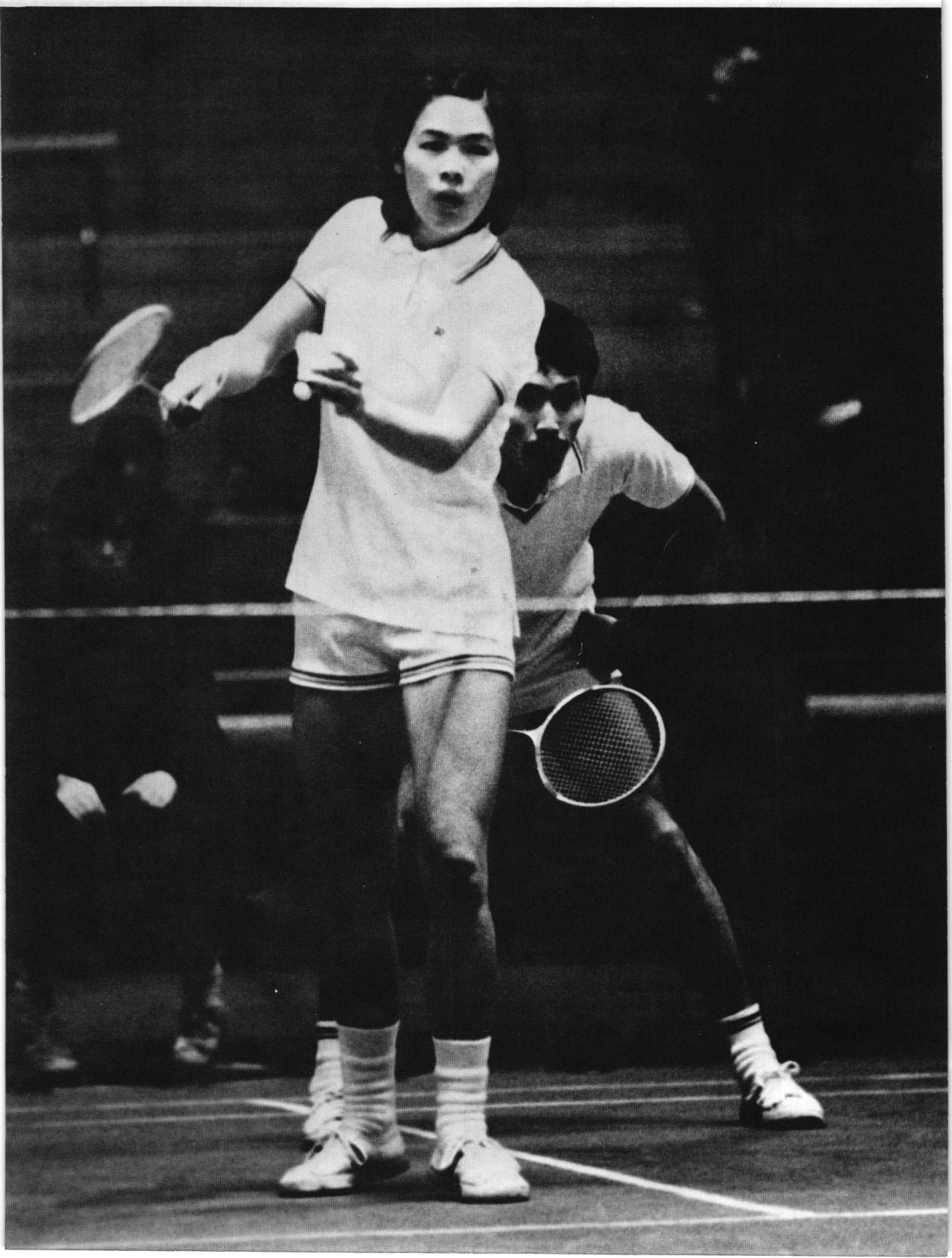
ナイスショット・14

無念!!
シャトルは二人の間を通り抜けてしまった．木戸・相沢組．（1973.12.16）
（1973.12.16）



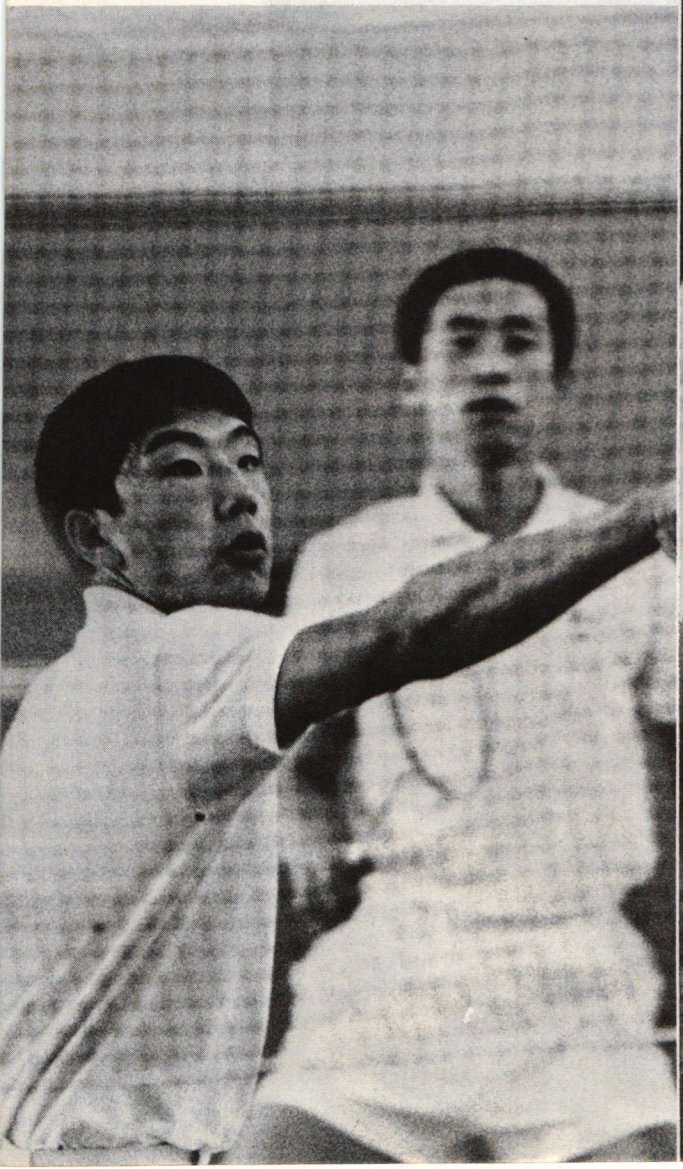
ナイスショット・15

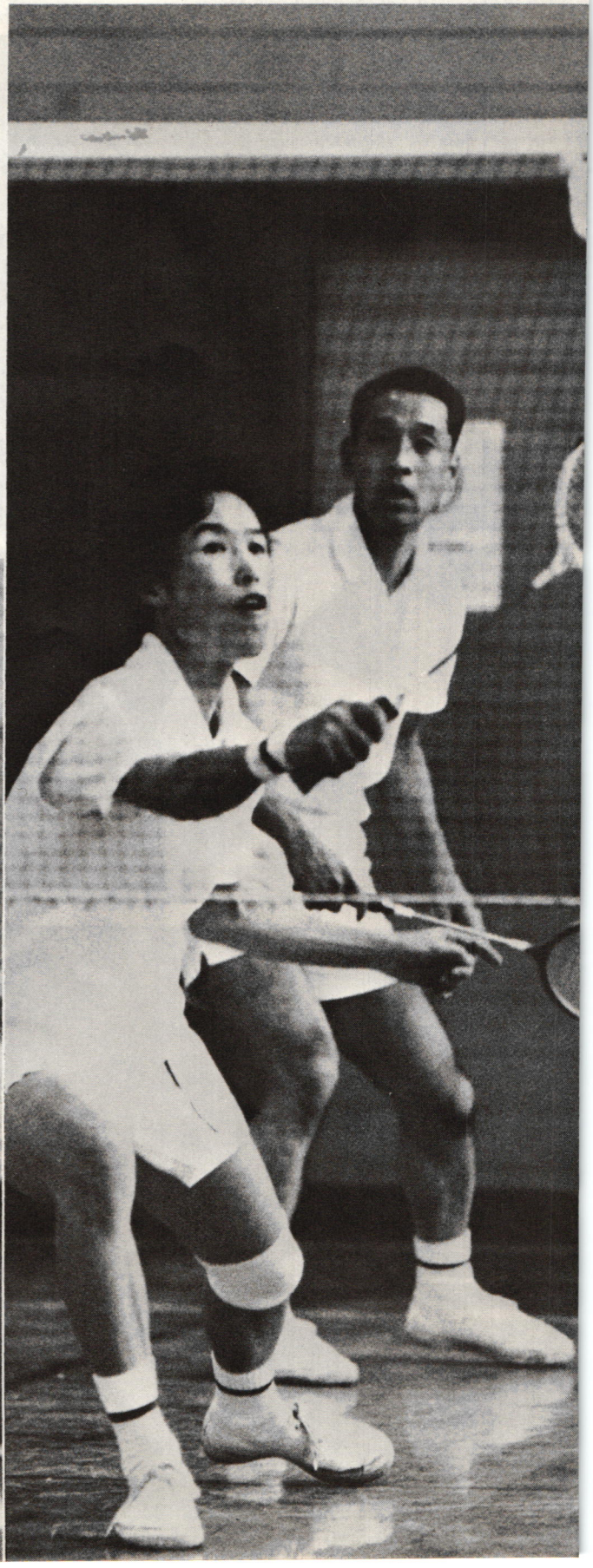
迫るッ!!
サービスをくり出す竹中選手の迫力．栂野尾選手も後ろで，鋭い視線を浴びせる．（1973.12.16）



ナイスショット・16

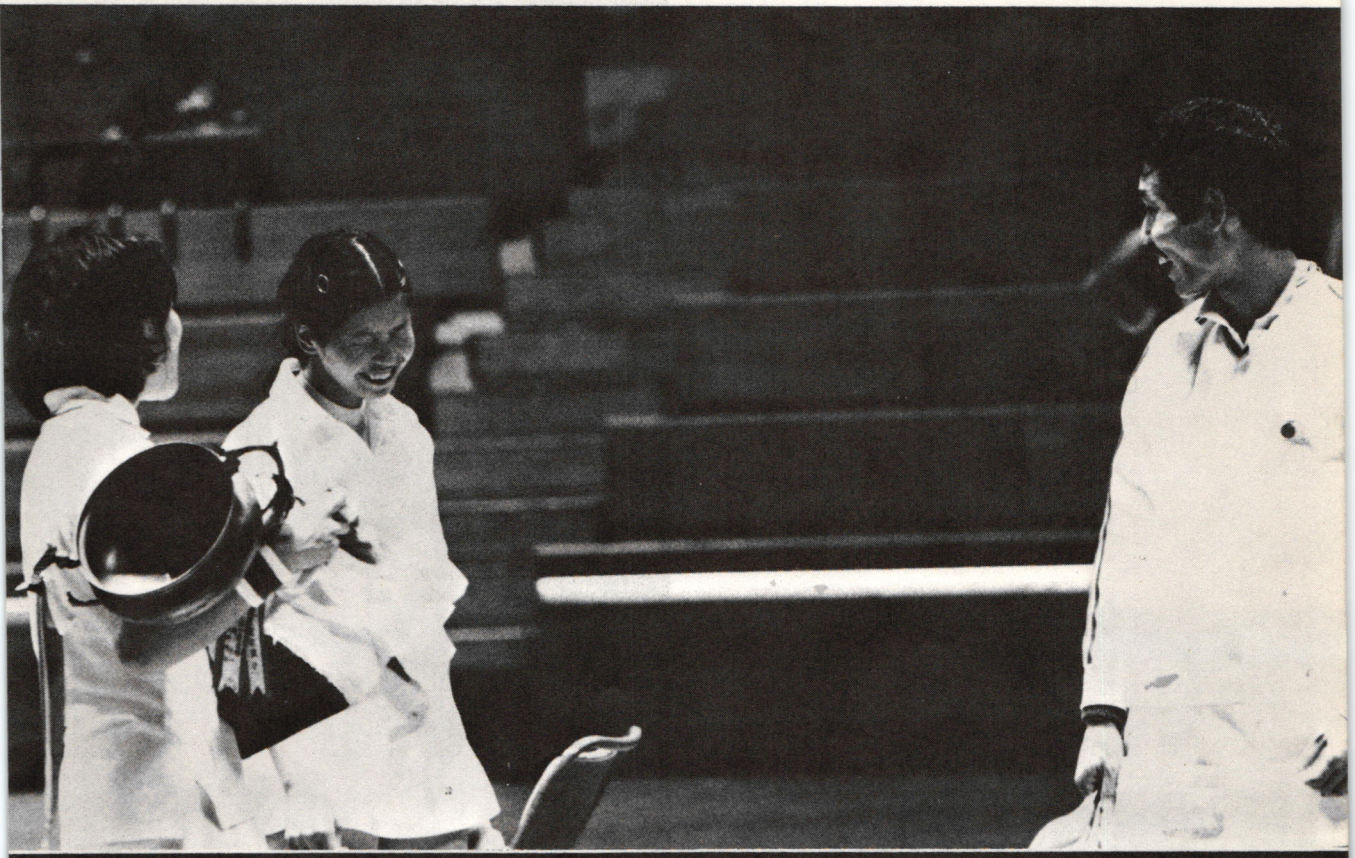
新旧ともに大奮闘．ベテラン杉田夫妻組，新人西村・梶川組．ともに気持のよいスカッとしたプレーを展開した．（1973.12.13）

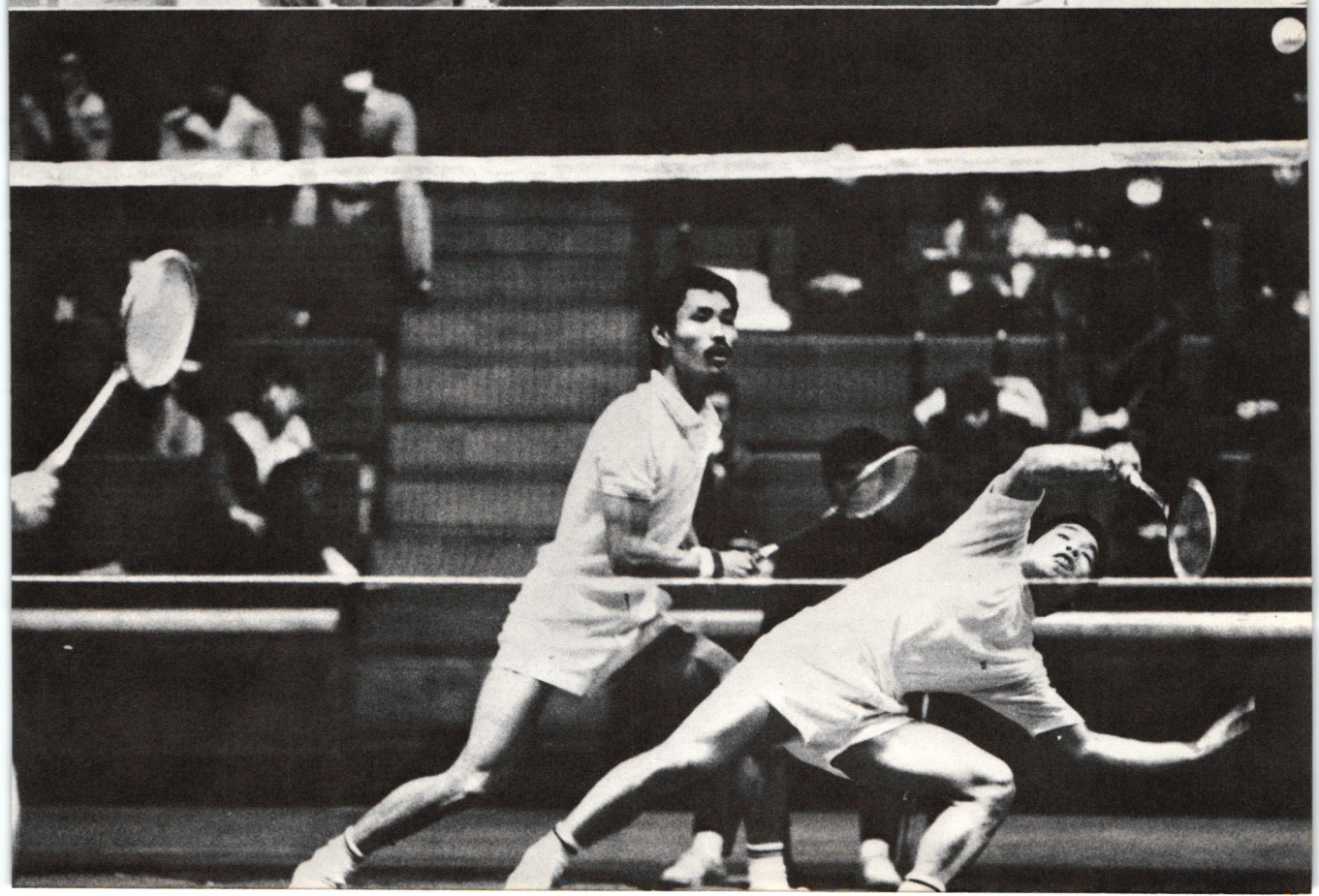




ナイスショット・17

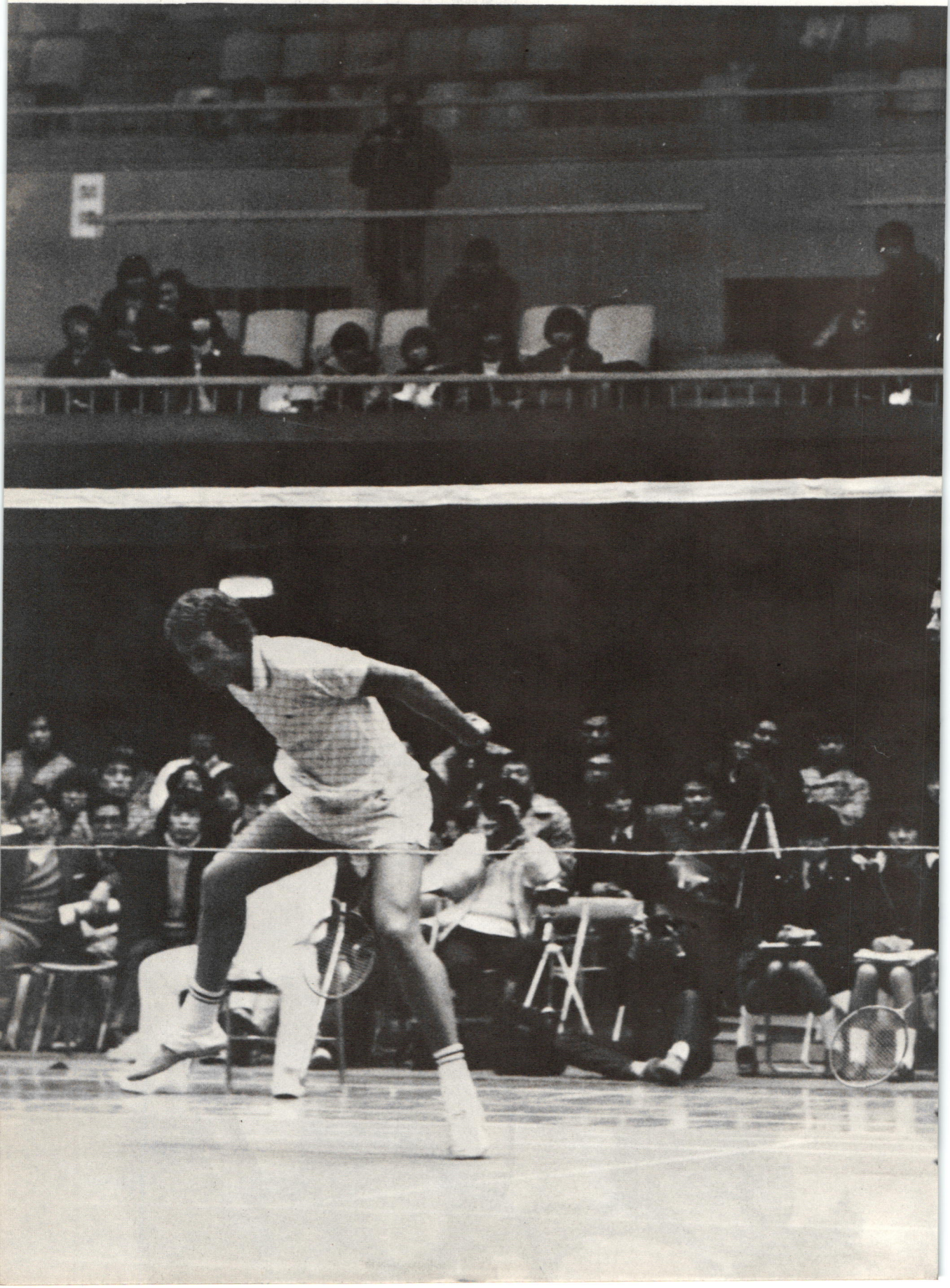
てれちゃう!!
栂野尾選手に祝福され，顔をクシャクシャにしてれる相沢選手.
危いッ!!
転びながら，よくレシーブ．健闘のかいあって見事優勝，池田・栂野尾組．（1973.12.16）





ナイスショット・18

失礼ッ!!
足の間でレシーブ. “ジャンボ” デルフスのコミカル・プレー
(1974.1.20)



ナイスショット・19

美しい和服姿の人から花束をおくられてごきげんの小島選手．ついでに歓迎会でも，またまたごきげん．
“ジャンボ”デルフスも“ガッツ”小島の美声（?）に目をパチクリ．
（1974.1.20）





ナイスショット・20 新人歌手（?）のデビュー．渋いノドを披露する小島選手．
（1973.1.20）



ナイスショット・21

寒い中をつめかけたファンの列.
この人たちの支えがあるからこそ日本も頑張れるのです. 国際親善に大いに貢献……. (1973.1.20)





ナイスショット・22

ママさん ファイト!!
ついに全関東の規模でママさん大会が開かれた．この努力をさらに広げるようにしたい．（1974.2.23）



●特別寄稿

デブリン杯観戦記

＝アメリカメリーランド州ボルティモアにて＝

松影昭夫

■アメリカで現在暮らしている松影昭夫さんは、石川県の奥村明義さんへ、第三回デブリン杯アメリカ――カナダ対抗戦のもようを送ってきました。

奥村さんのご厚意で、その全文を掲載させていただきます。

☆　☆

奥村様、お元気のことと思います。

前回の手紙でお約束しました第三回デブリン杯アメリカ―カナダ対抗戦観戦の印象などを、お知らせしたいと思います。

今回は、メリーランド州バドミントン協会がホスト役をつとめて、2月16日にボルチモア市フレンド校の体育館で開かれました。私の住んでいるワシントン郊外から約1時間で行けるので友人2人と出かけました。また、先日メリーランド州B級トーナメントに出場したこともあって、線審を依頼され、近くから充分に観戦することができました。

この対抗戦は一九六六年に、J・フランク・デブリンが「デブリン杯」を寄贈して始められたもので、二回目は一九七一年に開かれ、以後三年毎に行なわれることになっております。第一回は11－3でアメリカ、第二回は4－3でカナダが勝っています。ご存知と思いますが、Jフランク・デブリンは一九二三―三二年の間に全英選手権で、男子シングルス・ダブルスのタイトルを各六回づつ取っている名選手だった人で、その上、一九五〇代から六十年にかけてのアメリカ女子黄金時代の中心選手、ジュディー・デブリン・ハッシュマンとスーザン・デブリン・ペアードを育てたことでも有名です。したがってアメリカバドミントン界の中心人物の一人です。

またこの対抗戦に最近台頭著しいメキシコを加えることが、話題になったとのことですが今回は実現しませんでした。メキシコは、昨年のトーマス杯戦でアメリカを接戦の末、破っていますので参加していたら大変面白かったと思います。

デブリン杯は、男・女シングルス各二、男・女ダブルス各一及び混合ダブルス一の合計七試合の内四戦以上勝利した方が獲得することになっています。男女でチームをつくり、混合ダブルスも加えたことが特徴的です。

選手団の構成は次のとおりです。

カナダ・女子　ジェーン・ヤングバーグ（シングルス・女子ダブルス）、バーバラ・H・ウエルチ（女子・混合ダブルス）、アリソン・D・リッジウェイ（シングルス）、**男子**　ジャミー・ポールソン（シングルス・男子ダブルス）、ジャミー・マッキー（シングルス）、イベス・ペア（男子ダブルス）、ラフィ・カンチャナフィー（混合ダブルス）

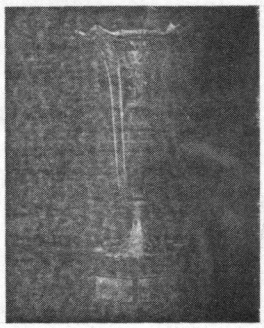
アメリカ・女子　パム・ブリストル（シングルス・女子ダブルス）、シンディー・R・ベーカー（シングルス）、ダイアン・M・ホールズ（女子・混合ダブルス）、**男子**　クリス・キナード（シングルス・男子ダブルス）、チャールズコークリー（男子ダブルス）マイク・ツォーカー（シングルス・混合ダブルス）

結果は6－1でカナダの圧勝に終わりました。

試合順を追ってみますと次のようになります。第一、二試合は女子シングルスで同時に行なわれました。第一人者同志の、ブリストル―ヤングバーグ戦は、ヤングバーグがショットの正確さと、ていねいな試合はこびで男子並の強力なパワーをもつブリストルを11－8、11－5で、くだしました。ベーカー―リッジウェイ戦もよく似た試合経過で、地味だが、ねばり強く、きめこまかい試合はこびをするリッジウェイが、パワーはあるがフットワークとバックストロークに難のあるベーカーを11－3と軽く破りました。

ブリストル（現在アメリカ三冠女王）は、非常によい資質をもった人ですが、国内によい対抗選手がいないため、少々荒くてもパワーだけで勝てるところに問題があるようです。同様の印象は男子選手やアメリカの他の多くのプレーヤーについてもよく感じることです。

第三、四試合は男子シングルスです。トップ同志のキナード、ポールソン戦は、女子シングル



デブリン杯のプログラム表紙

デブリン杯
プログラム裏表紙



コミカルなCMもはいっているようです……

戦と同様、総合力でまさるポールソンがキナードを15－9、15－1で圧倒しました。キナードは去年、数ヶ月間インドネシアでハルトノの練習相手をして修業してきたとのことですが、ショットが荒らく、特に第2ゲームではバックマウトを多発していたようです。

ポールソンは、世界ランクでどのあたりに位置しているか知りませんが、よいフットワーク上半身のやわらかさ、ていねいで正確なショット、かなり強力なスマッシュと総合的な力をもち、好印象をうけました。

もう一つの男子シングルス、ウォーカー－マッキー戦は混合ダブルスと共に最も好ゲームでした。ウォーカーはアメリカ選手にはめずらしく、各ショットごとにフェイントをかけ、コースを打ち分けて、あいてを攪乱しようとします。しかし、このため、ショットのスピードが、少し遅くきめ球を欠いていたと思います。

一方マッキーは、よく練習していることがわかる、若々しい動きで対抗しました。結果は、17－15、8－15、17－14でマッキーが勝ちましたが、一時間に及ぶ接戦でした。ここでカナダは早くも四戦を取り、試合をきめてしまいました。

第五戦は女子ダブルスで、ブリストル・ホールズ組対ヤングバーグ・ウェルチ組で、カナダ組が、アメリカ組のコンビネーションの悪さについて、15－10 15－11で勝ちました。大柄で、パワーのあるブリストルと小柄（一五〇センチ）でレシーブがよく、うまくショットをつなぐホールズとは面白いペアーですが住んでいる州が異なるため、余り一緒に練習したことのない即席コンビではないかと思います。

男子ダブルスは、力と技の対決で、一応点の上では接戦ですが（15－11、11－15、15－6）第二ゲームではアメリカ組（キナード・コークリー）のスマッシュがきまり、第三ゲームでは逆にこれがバックアウトとなって自滅しました。特にジュニアチャンピオンのコークリーは上背があり、大砲のようなスマッシュで、四、五回もシャトルコックをつぶして観客をあきれさせていました。この人はフットワークに少し難があるようですが、まだ二〇才前なので大物に成長するかも知れません。

カナダ組のイベス・ペアは、ベテランで、天才的なプレーヤーです。日本でいうと北方さんのプレーと似ていると感じました。大変よい読みと反射神経によるすばやい動きと正確なショットは、ポールソンの総合力とよいコンビネーションをなしていました。実力は点差以上にカナダ組が上だと思います。

最後の混合ダブルスは大変よい試合でした。特に印象的だったのは小柄なホールズのプレーです。スマッシュは弱いのですがよいフットワークとよくコントロールされたショットは、この体で、シングルスも、全米ベスト五以内にいる、この人の日頃の練習によるものでしょう。

特に相手のスマッシュに対して、サービスラインの近くで、低くかまえて、顔の正面でレシーブし、しばしばきめ球にしていました。カナダの両選手は、パワーと技術を兼ねそなえた好プレーヤー（特にウェルチ）ですが、第三ゲームでカンチャナフィーが疲れてミスが多くなり失ってしまい（15－9、17－18、15－11）カナダは全勝をのがしました。

ひと口でいえば、カナダの総合力がアメリカのパワーを打倒したというところです。特にアメリカのフットワークとショットコントロールの悪さ（ウォーカー・ホールズを除く）が目立ちました。

これは練習不足に由来するのかも知れません。前にも書きましたが、アメリカのバドミントンはシーズン制をとっており、10月から4月までで、5月－9月の間は、一流プレーヤーでもテニスをやっている人が多いようです。

一方、カナダは夏が短かく、涼しいため、実質的に一年中練習しているようです。アメリカでシーズン制をやめて、一年中プレーすることを呼びかける人もいますが実現は遠いようです。なぜなら、アメリカでは、スポーツをやることは何よりもまず娯楽であるという考えが基本にあるからだと思います。したがってプレーすることが気持よく、楽しみでならない訳です。

よけいなことを書いてしまいましたが、日本人とアメリカ人のスポーツにたいする考え方の違いは、かなり大きく、このことには大変興味があります。機会がありましたらこのことについても、お知らせしたいと思います。

もう一つ興味あるのは、この対抗戦の運営です。日本で国際試合などになると、スポーツに関係の余りない、政治家や財界人などを役員に加え、金集めをやって、大げさなものになるのが普通です。（中国チームの来日記事を読んでも、そういう印象をうけました）こちらでは全く地味で、地元のクラブ員とバドミントン協会の人の協力でやっており、全てバドミントンを楽しんでいる人ばかりです。

したがって、国際試合というよりはクラブ対抗戦といった感じです。予算面もアメリカバドミントン協会から（登録選手の会員）と入場券買上げ（7ドル四～五〇〇人）とでまかなっていると思われます。

トーナメントのレセプションも、会員制のパーティーが普通で、大ていは個人の家か、学校のホールのようなところで行なわれます。食べ物をクラブの女性メンバーや奥様方、飲み物を男性メンバーが準備するわけです。今回もパーティー券が売り出され、誰でも、選手と歓談する機会をもつことができます。

マスコミのとらえたバドミントン

このページは、新聞や雑誌などに紹介されたバドミントンに関する記事を広く読者の皆様に紹介するものです。各マスコミ関係者、ユニバーサル通信社、そして読者の皆様から送られてきた切り抜きとコピーを中心にして構成していきたいと思いますので、読者の方々で記事をごらんになった人は、ぜひバドミントン界編集部あて切り抜きかコピーをお送り下さい。お待ちしております。

なんといってもマスコミの力は大きいものです。こうしていろいろな形で紹介されることでバドミントンがさらに普及発展していくと確信しています。このページをお借りしてマスコミの皆様にご協力をお願いいたします。

宛先＝〒150 東京都渋谷区神南一ノ一ノ一・岸記念体育会館内・日本バドミントン協会・バドミントン界編集部マスコミ係

四回連続で全国優勝

愛媛県・浜中　誠さん

浜中さんがバドミントンを始めたのは二十四歳のとき。スポーツは十八歳から二十五歳ぐらいまでが脂の乗り切ったところだから、浜中さんのスタートは遅い。だが全日本実業団の壮年シングルスで四回優勝を果たした。いわゆる大器晩成型なのだろう。

『バドをはじめたのは会社（丸善石油）の上司が米国から道具を買って帰ったのがきっかけ。二十八年でした。五人ぐらいで〝ハネつき〟のつもりでやりました。二十九年に最初の公式戦に出たのですが、あまりにヘタくそ。全く試合にならず失笑をかったものです。それからですよ、〝よしやったるで〟と本格的に取り組んだのは…』

浜中さんもバドに対する認識は浅かった。しょせん女の子のハネつき程度に考えていたわけだ。それが取り組んでみると意外に激しいスポーツだったということがわかった。『バドは緩急の激しいスポーツ。せまいコートのなかながら瞬間的なスピードが必要です。でも子供から老人まで、あき地があればどこでもやれるというのも魅力ですね』

浜中さんの一番の自慢はなんといっても全日本実業団壮年での四回優勝。四十四年からずっと優勝を続けたが、五回目にはわずかの差で敗れた。『五年連続優勝をねらっていたのですが…。これが達成出来たら引退もと考えていました』と盛んにくやしがる。いまでも優勝したときより負けたときの方が思い出に残っているそうだ。

『愛媛県のバドミントンも曲がり角。小、中学校にバドミントン部を作らないと強くなりませんね。小さい子供のころからやっていないと全国大会でも入賞出来ません。それに指導者と体育館などの施設不足が目立ちます』

浜中さんは長崎県対馬の生れ。丸善石油に入社して本県に来たが、現在は完全に県人。本県バド界の将来に思いをはせていた。

（愛媛新聞　2・27）

主婦も会社員も汗だく

教室は午後六時から八時まで。ナイターである。会社を終えたサラリーマンやオフィスレディーそれにふだん着、つっかけスタイルの飾りっ気のない主婦たちが、会場の徳山市体育館に集まってくる。年齢、職業はさまざまだが、いずれもスポーツ好きの仲間である。「ぽつぽつ腹の出が気になる年ごろ。もちろん、健康増進がねらい。ゴルフなんかと違い、手軽に楽しめる」と中年のサラリーマン。主婦たちが美容体操のつもりといえば、若者は「ストレス解消、体力づくりとねらいはいろいろある。が、パチンコ、マージャンに比べ健康的。ひと汗かいたあと、仲間と飲むビールの味は格別だ」「ショッピングで暇をつぶすより、生産的」と実利面での効果をあげた。

「せっかくの施設をこのまま遊ばしておくのはもったいない。市民の健康づくりに役立てる方法はないものか」。きっかけは山口国体（三十八年）用に建設された市体育館をどのように効率的に生かすかにあった。市教委が首をひねって考え出したのが、市民への無料開放。市体協の協力で、さっそく翌年四月、卓球、バレーボールとともに市民のスポーツ教室として産声をあげた。

「だれでも自由に参加でき、そこでスポーツの楽しさ、良さを知ってもらえば目的の大半はかなったようなもの」と藤井生太郎管理係長。ねらいはスポーツ人口の底辺の拡大にあった。だから、常時教室に集う三、四十人の大半は社会に出て初めてラケットを握ったという初心者。むずかしいルールを抜きに、和やかにゲームを楽しんでいる。

コーチは沢田恭二徳山工教諭、徳山曹達勤務の大森啓令さんら市バドミントン協会の役員ら。教室とはいえ、自由参加だから系統だった練習スケジュールはない。指導の希望があったとき初めてコーチが気がついたことを助言、マンツーマンで指導するのが特徴だ。

教室の成果は地域にも浸透している。一人前のプレーヤーに成長した生徒たちが、地元クラブチームの指導役を買っている。須金、久米、湯野、加美地区など、地域スポーツの盛んな地区はいずれもここの生徒たちが活

動の柱になっている。

「社会体育の振興は一流プレーヤーの養成で頂点を高め、一方では地域にスポーツの輪を広げることにある。今後もねばり強く指導していきたい」という沢田先生の言葉を待つまでもない。教室を足場に市民のスポーツへの関心は徐々にだが、着実に高まっている。

（中国新聞　3・11）

大衆化めざし機構改革

群馬県・神沢　暁さん

わずか半年の間に、日中交流と欧州選抜招へいをやってのけたらと思ったら、今度は新しい協会作りに乗り出すという大活躍を演じた神沢さん。昨年二月末新理事長に就任しまだ一年しか経っていないのだが、この人のやることは、今までの協会のやり方を引っくり返すほど新しい施策がポンポン飛び出す。

「矢つぎ早にいろんなことをやるんで、古い人はビックリしているんじゃないですか」と自分でも苦笑している。

就任した時、三つの新方針を掲げた。①底辺の拡大②計画的な選手強化③毎年、国際大会か全国大会の開催―だ。この〝三本柱〟を一次、二次の五カ年計画に分け、五十八年国体で集大成しようというのである。この一年間はまず、マンネリ化した協会の現状打破をめざしたという。それが、国際大会二つの開催につながった。その結果は「まず大成功といってもいいんじゃないか」というほど、大きな成果があった。その理由に①一般県民のバドミントンへの関心と興味が、かつてない幅広さで浸透した②それまで、とかく歯車のかみ合わなかった組織内部が、すっかり一つになったーをあげ、おまけに「組織に埋もれていた〝若い力〟が息を吹き返した」そうである。

「まだ若いし、あの男にほんとにまかせていいのか、と疑問を持った人もいたと思うんですが…」。この一年で、すっかり信用をつけた、という。特に自分を押してくれた若い人には〝頼れる兄貴〟になれた、と顔をほころばす。

そこで、一年目の成果を踏まえ二年目の当初に打ち出したのが、今度の機構改革で、国体不人気の元凶でもある社会体育サイドからアプローチしようというわけだ。競技オンリーだった協会を脱して、県民みんなが楽しめるスポーツにしようというのが大きなねらいという。

「チャンピオンシップ・スポーツとレクリエーション・スポーツの〝両輪〟で進もう、というわけなんです。スポーツの大衆化に花を咲かせ、協会をすその広いピラミッド型に仕上げるのが理想です」。これから始まる計画を「これまでの古い意識を変革して、メカニズム中心から人間中心への一大転換をはかるつもりだ」ともいった。日野貞夫会長も「面白いから大いにやってみろ」と、温かい目で見守ってくれるそうである。若い理事長の発想は柔軟で、夢が大きい。飛び出す話題に〝さわやかさ〟がある。神沢さんは太高、日大とバドミントンの名選手として鳴らした。

（上手新聞　3・14）

青春を呼び戻す一打

仙台・バドミントン教室

ひところのバレーをしのぐほど主婦に人気があるバドミントン―。仙台市のレジャーセンターにある「主婦のバドミントン教室同好会」のママさんたちは、青春時代に帰ったように若やいで、プレーを楽しんでいる。

この同好会は同市教委が昨年九月に開いた「主婦のバドミントン教室」の受講生たちで結成された。月に四回、約二時間、彼女たちは〝娘〟になる。掃除、洗たくなどの家事を早めに片付けて、いそいそとやって来る。

―始めたきっかけは？

「健康のため。ウン、美容のためネ」

「何か運動したかったの。子供が大きくなって手がかからなくなったでしょ。だから」

「もう、これ以上フケたくないから」

「ストレス解消のためよ」

発足当時は四十人だった会員も今では八十一人に増えた。

「おねがいしまーす」―準備体操のあと、四面のコートでさっそく始まる。当然、うまい人と下手な人がいる。だが、この同好会ではそんなことはおかまいなしだ。スポーツだからルールもあるし、作戦もある。しかし、気にしない、気にしない。シャトルを打ち合って和気あいあいだ。

最年長ということで会長にまつり上げられた？　真山絹子さん（五六）＝同市花京院通＝は「この年してラケットを持って歩くのは恥ずかしい気もしたのですが…、なにしろ、なんでもやってやろうの〝やじうま根性〟が強いもので…。スポーツは人間を明るくするでしょう」と威勢がいい。

「週に一日ぐらいは自分の時間が必要ですよね。物価高も忘れてスカッとします」と酒井原英子さん（三四）＝同市南小泉＝。そばで菅原千都枝さん（四四）＝同市山手町＝も「初めは恥ずかしくて紙袋にラケットを隠して歩いたものです。でも、同年代の人といろいろ話せて、自分自身の勉強になります」と声をはずませる。

会費は月四百円。ラケットはふんぱつしても二、三千円。服装は動けさえすれば、どんな格好でもいい。これだけの〝出費〟と、ちょっとした〝勇断〟で、彼女たちは、過ぎたはずの青春を取り戻した。

（河北新報　3・18）

家族連れで〝お祭〟

埼玉・家庭婦人大会

「ラケットをお持ちでない方はお貸しいたします」「お子さんはどうぞお連れ下さい。試合中は女子高校生がお相手をいたします」などのキャッチフレーズで県内各地から参加者を募った結果、この日は六十五チームのママさんペアが参加。主催者側の五十里光秋協会理事長は「こんなに集まるとは思いもよりませんでした」と正直なところを打ち明けた。

参加者は、個人で申し込んだ人もあるが、与野、蕨、上尾などの「ママさんバドミントン教室」からの人がほとんど。経験者もいればバドミントンを始めて間もない人も…。白の運動着をさっそうと着こなし、子どもやご主人に見守られて必死でシャトルを追いかけた。そこには強烈なスマッシュや絶妙なサーブはなかったが、「羽根つきでもいいんです。一に親善二に勝負ですから」の五十里理事長。

ベンチで子どものめんどうを見る付き添いパパ。試合の合間にミルクを飲ませるママ。時には、ヨチヨチ歩きのチビちゃんが「ママー」とコートの方へ。「すぐ終わるから、あっちで待っててね」などなど。会場は試合というよりレクリエーションといったようなムードがいっぱい。

与野市の「なでしこクラブ」から参加した田村・清水組は「お祭りだと思ってきました。でも、本当に楽しいですね」と、大変な気の入れよう。このクラブは、二年前にスポーツ教室から発表したもので、現在週一回の練習日を設けている。身体が動くうちはやりたいという清水さんは「来年は五十歳なんですよ」。また田村さんは「子どもが受験勉強やっているというのに、のんきなお母さんね」と明るく笑った。

最も遠くから参加したのは、飯能市の「ファミリーバドミントンクラブ」。これも市のバドミントン教室から発展したクラブで、今回は七十人の会員の中から五ペアが参加した。〝引率責任者〟の市教在社会体育係・宮岡晃係長は「試合に出るのは初めてなんですが、恥を忍んでやってきました」といいながら、じっとプレーを見守っていた。

「暗中模索の状態です」（主催者側）といいながらも、この大会もまずまずの晴朗に恵まれて出航。五十里理事長は「うちの生徒（川口女子高）が少なくて公約の保育所が開設できなかったのが残念」という。しかし、なにごともはじめから完ぺきにというわけにはいかない。「私たち（婦人）にとって、バドミントンは手軽でいちばん」という声が多いことも重視して、これからますます参加者を増やしていってもらいたいもの。

ただ、三十五歳以下の参加者が十三チームと少なかったということは、やはりママさんがスポーツを行うとなると、どうしても子どもから手の離れる三十五歳は超えないと無理ということか。

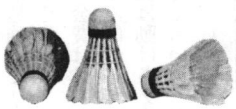
（埼玉新聞　3・19）



水鳥　検定合格球

ファストゴールド

ファストシルバー





ファスト印シャトル
コック　製造発売元

有限会社　ジャワ商会

山形市六日町7の28
電話 0236(33)0333(代表)

ロコミで今や五十人を超す

甲府・アロークラブ

体力づくりに―と始めたバドミントンの仲間同士で結成したアロークラブが甲府・県営体育館を舞台に活躍している。いまでは会員は男女含めて五十人にも及んで、すくすくと育っている。

このクラブは四十六年四月、同体育館に勤務している安田憲正さん、県バドミントン協会理事の新津勝さんら三人で始めたものがその後、口コミで仲間が集まり、いまでは五十人にふくれ上がった。

高校時代にインタハイ、国体に出場したバドミントン選手もいれば、女学校時代に陸上競技の選手をした主婦もいるが、グループのメンバーはほとんどがバドミントンとは縁のない人たち。

練習日になるとみんなこの日を待ちわびたように集まり、狭いコートで白いシャトルコックを追っている。この競技は瞬間的なスピードが要求され、予想以上にスタミナを必要とする。基本から試合形式の練習を繰り返しているが、みんな汗だく。

バドミントンの選手をしたことのある野口治英さん(三六)は、「昨年四月に入れてもらったんですが、はじめは五分も練習すればもう心臓がどきどきだった。いまでは一日五セットぐらい出来るようになった。しかも体重は八㌔も減るなどクラブに入って本当によかった」と説明する。

「家にいるとちっとも汗をかかない」といってバドミントンを始めた主婦の小松妙子さんは、甲府二高時代陸上競技の選手。同じ主婦の笹井治子さんは、ママさんバレーボールの選手である。

この笹井さんは「スポーツをやらなければ体がおかしい」と言うほどの大のスポーツ好き。昼はバレーボール、夜はバドミントンと大活躍である。そのうちご主人と娘さんも加わり、いまでは一家総出でバドミントンに興じている。娘さんのたか子ちゃんは小学校六年生ながら、身長**160**㌢。「将来は選手に」というほどに、実力を伸ばしている。

月会費は一般千五百円、高校生千円、小・中学生五百円。しかし物価の異常高騰は、ここでも例外ではない。シャトルコックが大幅に値上がりし、一ダース二千五百円。月に五ダースを使う。体育館の使用料を含めれば、ばかにならず頭が痛いようだ。「健康は金を出しても買う時代」といいながらも、クラブ員はきょうもシャトルコックを追っている。

(山梨日日新聞　3・26)

行動派会長登場

山梨・原二三雄さん

「会長が悪いと思ったらすぐに交代させて欲しい」会長就任の第一声である。まだ五十歳という青年会長の誕生である。バドミントンは本県では全国に通じる数少ない種目の一つ。それが昨年の千葉国体で、期待の一般男子がベスト**4**入りを前に敗退するといった〝赤信号〟が出た。その矢先の会長就任だけに、ものすごい張り切りようである。

まず五月上旬には来年開催の青森国体高校選抜チームを招待、続いて全日本のトップクラスを山梨に呼んで招待試合を行う。そればかりか全日本チャンピオン小島のいる横浜と定期戦を始める。さらに甲府市では社会人リーグを実施するといった具合に選手強化の青写真を持っている。「試合を数多くしなければダメだ。それも日本のトップクラスを招いて、いいプレーを見なければ、井の中のかわずでは、いつまでたっても強くならない」という持論からだそうだ。

甲府商時代はサッカー。社会人になってからバドミントンを始めた。それが昭和二十五年に全日本選手権大会で準決勝進出、翌二十六年には東西対抗で東軍の代表として出場、国体にも八回というかがやかしい職歴の持ち主。〝全国〟をいやというほど知っている。それだけに、言葉にも熱がこもる。この二十四日、やっと出たホープと期待がかけられている落合、五味の湯田高女子コンビの試合を、東京まで見にいった。「一線のプレーヤーと接触しない会長はダメだ」と、行動派を自認している。電車の中でも二人に積極的に話しかけ、バドミントンへの意欲を引き出そうとしている。

今の高校生は根性がなく、厳しい練習についていけないといわれている。ところが新会長は「そんなことは絶対ない。指導者のもっていき方で、高校生はやると思う」と、理解があるところをみせる。それが「秋山・窪田のような日本に誇れるコンビをつくるのが、私の夢。その八割はいけます」という自信につながる。

底辺拡大も怠りない。甲府市の社会人リーグはその一つだし、小・中学一貫した強化システムも検討中である。金もみつけるかわりに口も出す。いやそれどころか、普及・強化の先頭に立つという。秋山・窪田の黄金コンビに衰えが見えている現在、頼もしい行動派会長の誕生である。

原一造県体協副会長は長兄に当たる。原副会長は強化三ヵ年計画を打ち出した張本人。さてどんな旋風をまき起こすか、活躍が注目される。

(山梨日日新聞　3・27)



カアルトン ニュートーナメント は水鳥？

ナイロンを感じさせないナイロン。

新開発された、カアルトン〝ニュートーナメント〟シャトルは、ナイロンと云うよりも英国製高級水鳥シャトルに最も類似した性能を備えた、新しいシャトルです。



ニュートーナメントの特徴

●打球音が変った●ラケットから離れる感じが変った●ネットでのターンノーバ（回転）が変った●スピン●シャトルに対する視覚度（よく見える）がよくなった●飛翔のときの一貫した安定性が増加された。

メトロレジャー株式会社

東京都千代田区外神田5-6-4 TEL. 833-3661（代）

協会通信

大阪府協会

昭和四十八年度大阪総合選手権大会は、三月九日（東淀川体育館）、十日（阿倍野体育館）の両日にわたって開催された。延べ二百五十名による激戦の結果は次のとおりでした。

▽一般男子シングルス
優勝＝丸山法男（スワロー化研工業）
二位＝和田泰寛（近畿大学）
三位＝山口博（松下ラジオ）

▽一般男子ダブルス
優勝＝鷲尾正一・水川九洋（スワロー化研工業）
二位＝遠藤和男・浅見初男（スワロー化研工業）
三位＝瀬良信明・平瀬博俊（近畿大学）

▽一般女子シングルス
優勝＝高田幹子（大一スポーツ）
二位＝仲西貴美代（スワロー化研工業）
三位＝福永久弐子（双葉クラブ）

▽一般女子ダブルス
優勝＝仲西貴美子・気谷悦子（スワロー化研工業）
二位＝高田幹子（大一スポーツ）・乾須賀子（ゴーセン）
三位＝野村奈保子・貴田絹子（スワロー化研工業）

▽三十歳男子シングルス
優勝＝本山一郎（塩野義）
二位＝本摩恒利（塩野義）
三位＝中西義弘（瓜破東小）

▽三十歳男子ダブルス
優勝＝本摩恒利・北川忠雄（塩野義）
二位＝北野敏四郎（向丘小）・宝来敏夫（平野小）
三位＝本山一郎・妹尾健史（塩野義）

▽四十歳男子シングルス
優勝＝林辰夫（スワロー化研工業）
二位＝西谷一郎（豊中ク）

▽四十歳男子ダブルス
優勝＝林辰夫（スワロー化研工業）・西谷一郎（豊中クラブ）
二位＝宮脇正晴（文の里中）・島津八郎（槇塚台小）

▽混合ダブルス
優勝＝遠藤和男・貴田絹子（スワロー化研工業）
二位＝六津井正一・飯田るみ子（中央ホーム）
三位＝角田勝・乾須賀子（大阪ゴーセン）

兵庫県協会

昭和四十八年度近畿総合選手権大会は、三月十七日、神戸市立中央体育館で盛大に行なわれ、次のとおりの結果となった。

▽一般男子シングルス
一位＝浅見（大阪）、二位＝竹原（大阪）、三位＝丸山（大阪）

▽一般男子ダブルス
一位＝鷲尾・水川（大阪）、二位＝遠藤・浅見（大阪）、三位＝岩田・滝野（大阪）

▽一般女子シングルス
一位＝植野（大阪）、二位＝門間（和歌山）、三位＝桜井（兵庫）

▽一般女子ダブルス
一位＝高崎・尼崎（兵庫）、二位＝植野・秋本（大阪）、三位＝仲西・気谷（大阪）

▽成年男子シングルス
一位＝杉田（大阪）、二位＝広瀬（兵庫）、三位＝土井（兵庫）

▽成年男子ダブルス
一位＝土井・広瀬（兵庫）、二位＝太田・金井（兵庫）、三位＝北野・宝来（大阪）

▽壮年男子シングルス
一位＝曾根（京都）、二位＝尾崎（兵庫）、三位＝吉田（兵庫）

▽壮年男子ダブルス
一位＝久代・曾根（京都）、二位＝八木・郷原（兵庫）、三位＝林・西谷（大阪）

▽混合ダブルス
一位＝遠藤・目黒（大阪）、二位＝六津井・飯田（大阪）、三位＝植田・柿本（奈良）

埼玉県協会

第一回埼玉県家庭婦人大会は、三月十七日、大宮県営体育館において行なわれた。

種目はダブルスのみだったが、出場チームは、三十五才以上が五十二チーム、三十才未満が十三チームでした。

結果は次のとおりです。

▽三十五才以上
一位＝高松・針谷（上尾）、二位＝力丸・内田（与野）、三位＝鈴木・大塚（与野）
同＝原・阿武（鳩ヶ谷）

▽三十五才未満
一位＝緑川（浦和）・田口（川口）
二位＝稲岡・田中（行田）
三位＝柿沼・青柳（行田）
同＝松下・阿部（大宮）

神奈川県協会

神奈川県総合選手権大会シングルスの部は、三月二十四日県立体育センターで開催され、男子は小島（ラケットショップ元町）、女子は杉田（日本コロムビア）が若手の追撃を振り切って優勝、実力をいかんなく発揮した。

男子準決勝は非常に内容のある闘いだった。小島は鈴木（三菱重工横浜造船所）の強烈なスマッシュ攻撃を受け、第一ゲームを奪われ、第二ゲームも先行されたが、じっくりと反撃して、勝負強さをみせた。

宮川（ラケットショップ元町）も、杉田（立野高校教員）の絶妙なレシーブ力にあって大苦戦。ファイナルゲームもセッティングにもつれこみ、最後はパワーで押し切った。

女子は、横尾（県庁）が金子（洋光台第一中教員）の食いさがりにあって苦戦をしたが、ファイナルゲームの末ふり切って決勝へ進出、杉田へ挑んだ。

第二ゲーム接戦の末ものにし、ファイナルゲームへ持ちこんだが、杉田は巧妙なテクニックと慎重な配球で優勝した。

優勝はいずれも順当なところであったが、鈴木・杉田の健闘ぶりは見事であった。その反面、ベスト8どまりであった、男子の高橋、山崎の関東自工勢、女子の紅野、秋山、佐藤の日立戸塚勢といった若手の奮起が望まれる。

▽男子シングルス
一位＝小島、二位＝宮川、三位＝鈴木、同＝杉田

▽女子シングルス
一位＝杉田、二位＝横尾、三位＝寺本（新日鉄）、同＝金子

■年間予約購読のおすすめ

本誌の購読は、年間予約が便利です。

本誌は**一部定価二百二十円**で、一年間十二冊は二千六百四十円となりますが、予約購読をなさいますと、**二千四百円**となります。送料は当方で負担いたします。

お申し込みは、本誌はさみ込みの振替用紙に必要事項をご記入のうえ、郵便局で手続していただくか、現金書留で代金をお送りください。その際、必ず何号からの申し込みかを明記してください。

〈宛先〉〒150 東京都渋谷区神南一ノ一ノ一
岸記念体育会館内
日本バドミントン協会
バドミントン界編集部

■本誌専用合本ファイル予約受け付けのお知らせ

═予価一部　五〇〇円

本誌は、読みすての雑誌ではありません。ずっと保存しておくことによってバドミントンの百科辞典にもなり、大切な資料ともなるものです。

しかし、長い間適当なファイルがなく、ご不便をおかけしていましたが、このたび専用ファイルをお取り次ぎいたします。このファイルは、本誌に穴をあけることなく、紐も不要で、簡単に一年分十二冊を綴じることができます。

ご希望の方は、必要冊数を明記して、バドミントン界編集部あて、必ず往復ハガキでお申し込みください。発送十日前にご案内いたしますので代金をお送りください。ご案内がいくまで、ご送金の必要はありません。

編集室から

○…第53号をお届けいたします。読者の皆さんから、かねて要望の強かったスナップ写真を中心に組みました。

ふだん、あまり目にする機会のない各プレーヤーの素顔といったものの〝魅力〟が少しでも皆さんに伝わるとよいのですが。

○…全英選手権の印象や、感想を湯木選手と栂野尾選手にきいてみました。池田（信）選手にもと思っていたのですが、折りからのゼネストにぶつかってしまい、とうとうつかまえることができませんでした。

そして、四月十六日、カナダオープン選手権大会に出発してしまいました。

カナダから帰国されましたら、また土産話でもと考えています。

○…石川県の奥村さんあてに送られてきました、デブリン杯の観戦記を、奥村さんのご厚意で掲載させていただきました。

本欄をかりて、奥村さんと、観戦記を書いてくださった松影さんにお礼申し上げます。

○…現在、連載は、小島一平選手と中山紀子さんの二本を中心としておりますが、〝私にとって忘れえぬ恩師〟〝忘れられぬ一戦〟の取材を開始しました。

できれば、毎回男女各一名ずつに登場していただければ、と考えています。

ベテランからホープまで、幅広くご協力をお願いしたいと思っています。

○…先月号から、本誌の合本用ファイルの予約を受け付けております。

ご希望の方は、早目に編集部あてお申し込みください。お申し込みは必ず往復ハガキを利用して下さい。詳しくは、右のご案内をよくごらんください。

○…バックナンバーは、現在整理中ですので、いましばらくお待ちくださるようお願いいたします。

○…次号の内容についてお知らせしましょう。

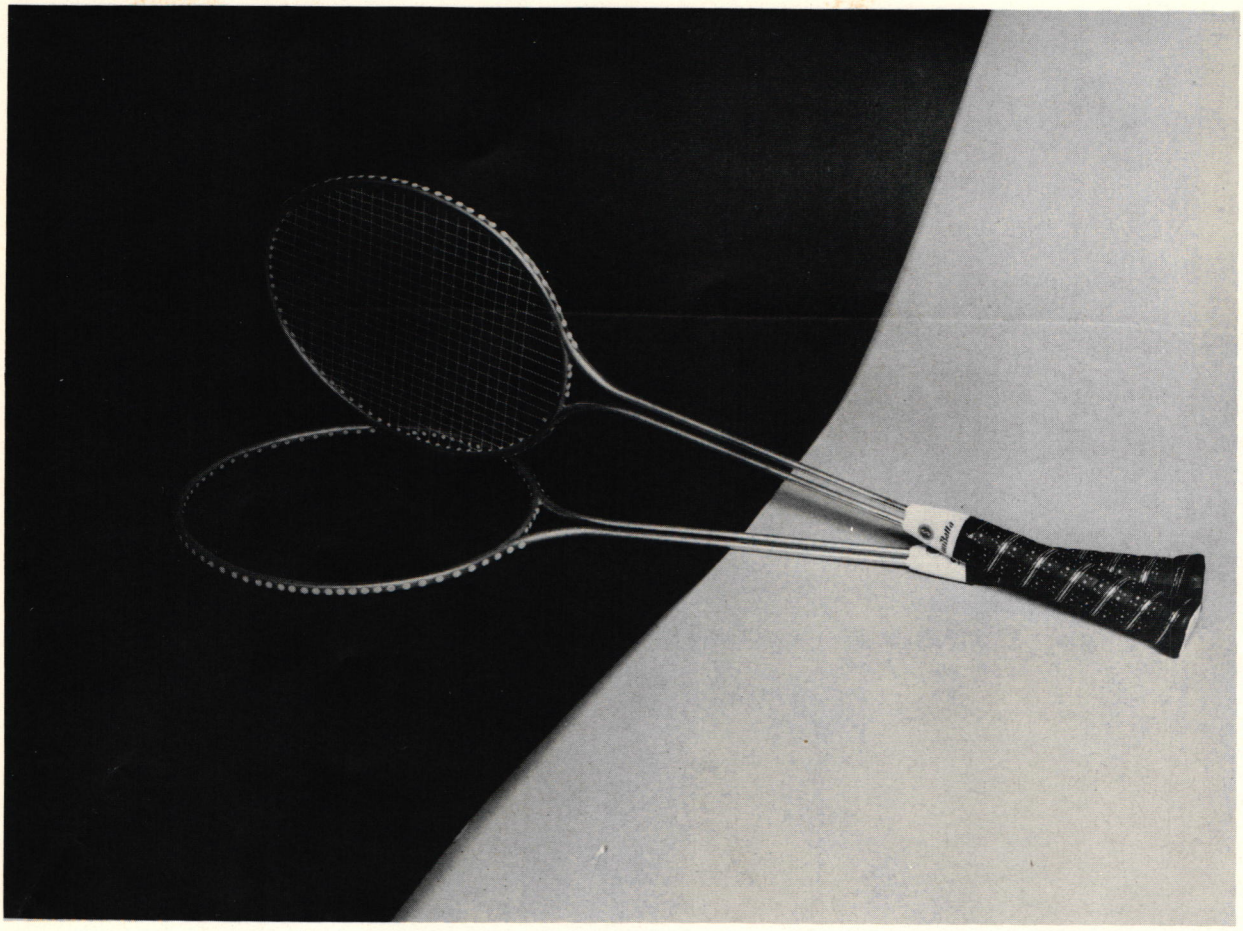
特集はピンナップです。できれば折り込みの大型写真を、と考えていますが、コスト面でちょっとムリかも知れません。

連続写真のように、選手の動きを的確にとらえることはむずかしいとは思いますが、一枚の写真から、多くのヒントが得られるような写真（たとえばスマッシュの瞬間、レシーブの足のふみ出し方など）を展開します。

全英大会のスナップも予定しています。ご期待を。（S）

【バドミントン界】第53号
昭和49年2月25日　印刷
昭和49年3月1日　発行
編集兼発行人　秦　浩
発行所　東京都渋谷区神南一の一の一
岸記念体育館内
日本バドミントン協会
電話　四六七・三一一一（内線）二五一
四六七・七〇九五（直通）
郵便番号・一五〇
振替口座・東京三二一九三
印刷所　東京都豊島区南大塚二ノ二九
明宏印刷株式会社
定価　一部二百二十円

©無断転載を禁ず



ALL STEEL RACKET SunBatta TWIN SHAFT

究明され！
完成された！
S-74
ALL ROUND

プレーヤーが長い間求めていたオールスチールが誕生しました。
従来のオールスチールラケットの利点及び欠点をあらゆる角度から究明され改良をし今ここに完成され皆様の目の前に現われました。
ツインシャフトの採用によって、フレームとシャフトとのひねりが最小限に押えられ自由自在なショットを楽しむ事が出来るでしょう。
アタックによし、レシーブによし、それがS-74オールラウンドです。
◇フレームのみ（ケース付）￥ 5,000

SunBatta TOKYO TRADE MARK JAPAN

サンバタ

月刊「バドミントン界」第53号
昭和四十九年三月一日発行（毎月一回一日発行）
発行所 東京都渋谷区神南一ノ一ノ一 日本バドミントン協会 定価二百二十円

パワーラケット誕生!!

——ハードヒッターにピッタリです!!

オールマン

No.B-73



精選された木材の画期的加工技術を開発。
5プライフレームの合板精度と、ロングで強靱なツルーテンパー・クローム モリブデンシャフトとの比類ない結合から生れた、かってないパワーとバランス。
一瞬の攻撃力にかけるプレイヤー待望の力強いラケットがついに誕生しました。
世界の檜舞台で信頼され、活躍するカワサキの新製品〝オールマン〟をぜひお試しください。

K TOKYO

kawasaki racket

河崎ラケット工業株式会社
東京都台東区台東2-28-5 TEL(831)9161(代表)